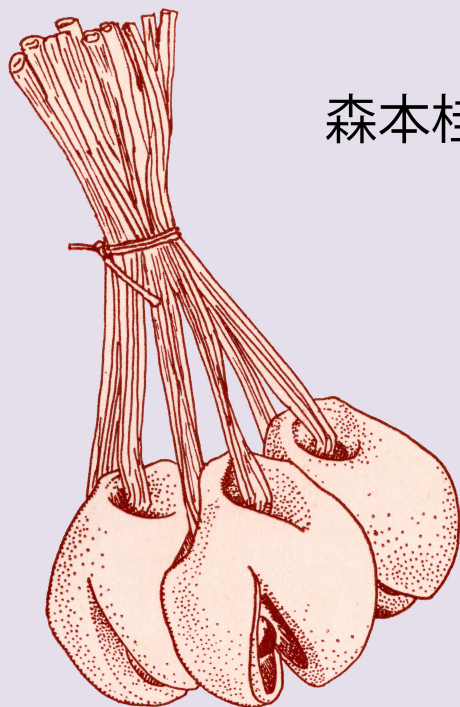


# ひこさん がらがら

森本桂先生追悼記念号

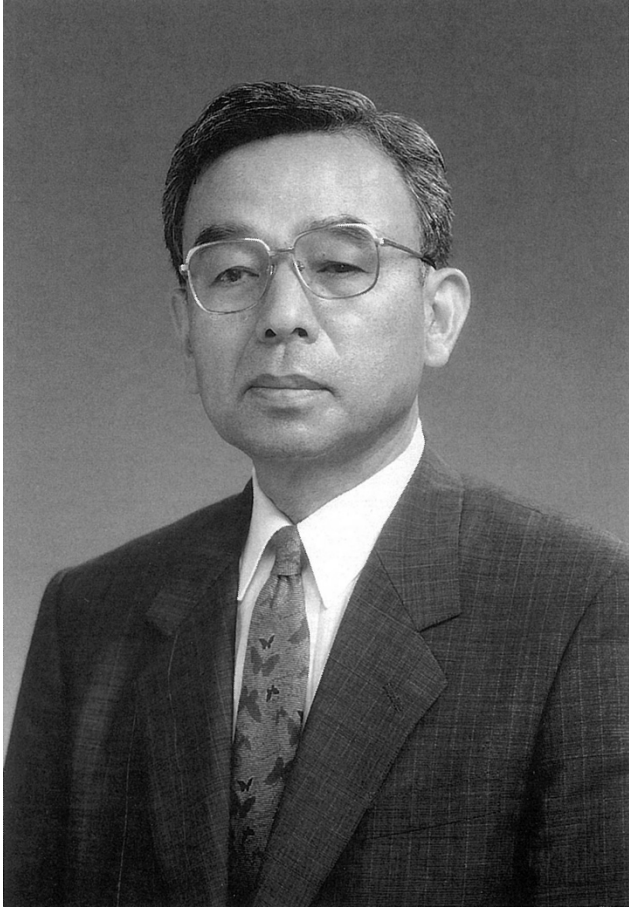


12 号

京都府立総合資料館

## 目 次

|                             |                  |
|-----------------------------|------------------|
| 森本桂先生のご略歴など .....           | (広渡俊哉) ...1      |
| 森本桂先生 業績目録.....             | (辻 尚道・今田舜介) ...5 |
| ケイちゃんとの出会い.....             | (80) 村上陽三...44   |
| 森本桂さん有難うございました .....        | (86) 三枝豊平...46   |
| 森本桂さんの思い出.....              | (91) 宮武頼夫...52   |
| 森本さんと伊勢湾台風.....             | (94) 河原畑勇...56   |
| 韓国調査と韓国人留学生の思い出 .....       | (154) 多田内修...58  |
| 森本桂先生の思い出.....              | (188) 広渡俊哉...61  |
| 森本桂先生を偲んで.....              | (196) 阿部芳久...63  |
| 森本桂先生との採集旅行の思い出 .....       | (200) 野村周平...64  |
| 恩師、森本桂先生との思い出 .....         | (228) 小島弘昭...67  |
| 森本先生の思い出 -先生と森林総研九州支所-..... | (237) 後藤秀章...70  |
| 森本先生に叱られた私の道草.....          | (239) 今坂正一...72  |
| 森本桂先生との出会い.....             | (253) 吉武 啓...73  |
| 森本先生と二度の小笠原、そして南鳥島 .....    | (257) 井上広光...80  |
| 森本先生を偲んで.....               | (350) 辻 尚道...84  |
| 森本先生から学んだことと思い出 .....       | (357) 今田舜介...86  |



森本 桂 先生

## 森本桂先生のご略歴など

森本桂先生は、昭和9年（1934年）1月1日に高知県でお生まれになり、昭和31年（1956年）3月九州大学農学部農学科を卒業後、同年4月に九州大学大学院農学研究科修士課程に入学され、昭和33年（1958年）3月に同課程を修了されました。同年4月に博士課程に進学された後、昭和36（1961年）年5月に農林省林業試験場保護部農林技官に採用され、昭和44年（1969年）4月農林省林業試験場九州支場昆虫研究室長に昇任されました。昭和53年（1978年）1月九州大学農学部助教授に転任、平成元年（1989年）7月同教授に昇任され、平成9年（1997年）3月停年により退職、名誉教授に就任されるまで昆虫学教室を担当されました。そして、令和元年（2019年）9月3日に85歳でご逝去されました。

森本先生の研究対象は多岐にわたり、ゾウムシ類やシロアリ類の系統分類と生態、松くい虫の生態と防除、タマバエ類の総合防除、森林生態系の昆虫群集などの研究で多くの成果を上げられ、その業績は国内外で高く評価されています。

学生時代から一貫して情熱を傾けられたゾウムシ類の分類学的研究においては、韓国、中国、台湾、香港、タイ、マレーシア、フィリピン、パプアニューギニア、バングラデシュなど、アジア各国を中心とした野外調査によりその種多様性を解明されるとともに、詳細な比較形態学的研究から新たな分類体系を提唱されました。その成果として、九州大学にアジア最大のゾウムシコレクションが確立されることとなりました。シロアリ類に関する研究では、東アジア産の種について分類と生態の研究を行い、総説や教科書を執筆されるなど防除業者の指導・教育にも尽力されました。松くい虫に関する研究では、マツを枯損させるマツノザイセンチュウがマツノマダラカミキリによって伝播されることや、線虫・カミキリ・マツ3者の相互関係を解明されるとともに、枯損防止法を確立されました。またマツノマダラカミキリの個体群動態とマツ枯損量の推移に関しても多くの成果を公表し、松くい虫問題の概

略を明らかにされました。これらの業績に対し、日本林学会賞、日本農学賞、読売農学賞、日本応用動物昆虫学会賞が授与されています。タマバエ類の総合防除に関する研究では、スギタマバエのスギ生長量と被害の関係を詳細に調査し、正常に生長しているスギでは被害を無視できることから、森林害虫として最も散布面積の広がった殺虫剤散布を中止させました。また、マツバノタマバエに関しては、その寄生蜂の有効性を明らかにして、大量飼育・放飼による実用的な防除方法を確立され、韓国で大規模に実行されました。

この間、先生は多くの学生や留学生を指導され、ゾウムシ類の優秀な分類研究者を育成されました。これらの卒業生は諸大学、農林水産省、国公立博物館、地方自治体、企業などの関連専門分野の重要な地位で活躍しています。また、研究教育にとどまらず、日本昆虫学会会長、日本応用動物昆虫学会評議員、日本環境動物昆虫学会評議員、環境庁野生生物保護対策検討委員などを務められ、昆虫学の発展に寄与されました。

森本先生は、日本昆虫学会では会長を務められるとともに、「日本の昆虫」の出版に熱意をもって尽力されました。第3巻までは「日本の昆虫」の編集委員長を務められ、ご自身もゾウムシに関する重要な論文を2冊出版されました。その後、九大関係者を中心に「日本の昆虫」の編集を引き継ぎ、現在までさまざまな分類群を扱った9巻まで出版されています。先生は、数年前に体調を崩されたにも関わらず、さらにゾウムシの1亜科(キクイゾウムシ亜科)をまとめて「日本の昆虫」に出版すべく原稿を準備されていたようです。それが実現できなかった点については心残りかもしれませんが、先生のご遺志は、先生が指導されてきた方々が引き継いで下さるものと思います。

令和元年(2019年)10月5日、先生のご逝去をお悔やみし、九州大学総合研究博物館で「森本先生を偲ぶ会」が催され、遺族の方を含め68名の方が参列されました(写真1)。「偲ぶ会」では、特に森本先生と親交が深かった同世代の先生方や教え子などが弔辞を述べられましたが、どのお言葉からも森本先生がいかに情熱をもって研究・教育に取り組まれたかを伺い知ることができました。折しも、「森本桂コレクションとゾウムシ学」と題する展示会が平

成 31 年（2019 年）4 月中旬から同年 8 月末日まで九州大学総合研究博物館で開催されていましたが、森本先生はこの展示会を見届けられるように、展示会終了後の 9 月 3 日に亡くなりました。同博物館では、この展示会を 10 月上旬まで延長し、「偲ぶ会」に参列された方々にも森本先生の標本や資料、採集道具などの所縁のある品々を見ていただいて、ともに先生を偲ぶことができました。また、有形無形の多くの財産を残された森本桂先生のご功績とお人柄を偲びつつ、ご冥福をお祈りいたしました。

「偲ぶ会」では、参集された「ひこさんがらがらの会」の会員の皆様に「ひこさんがら（森本桂先生追悼記念号）」の出版のご案内と先生の思い出などの寄稿をお願いいたしましたが、諸事情により出版が遅れておりました。この間、日本昆虫学会・日本甲虫学会の学会誌、「昆虫と自然」などで森本先生の追悼文が出版され、本会会員を含む多くの方が寄稿されました。今回の追悼記念号につきましては、その中でも森本先生と特に親交の深かった会員の皆様から改めてご寄稿いただくとともに、森本桂先生の業績目録を、先生が最後に指導された辻尚道君と今田舜介君にとり纏めてもらいました。この記念号の出版を、森本先生が喜んで下さることを心より祈念しております。

（広渡俊哉）

この報文は 2019 年に昆蟲（ニューシリーズ）22(4)に掲載されたものに加筆修正したものです。



写真1 「森本桂先生を偲ぶ会」2019年10月5日

## 森本桂先生 業績目録

### I ゾウムシ類の分類と生態に関する研究

- 1953 九州未記録の象鼻虫数種. 新昆虫, 6(3): 50.
- 1954 九州産アシナガゾウムシの手引. 北九州蟲の会々誌, (1): 1-3.
- 1954 シギゾウムシ (1). 北九州蟲の会々誌, (2): 13-16.
- 1954 九州産アシナガゾウムシの追加. 北九州蟲の会々誌, (2): 25.
- 1954 オジロアシナガゾウムシの虫えい. げんせい, 3(1/2): 5.
- 1954 タデサルゾウムシの産卵習性. 昆虫 [Kontyû], 21(1/2): 18
- 1955 沖の島産ノミゾウの1種の記録. げんせい, 4(1/2): 5.
- 1955 ヒメササラゾウ (新称) の分布と加害植物. 昆虫 [Kontyû], 23(2): 82.
- 1955 吉田智昭氏採集の白島産ゾウムシ. 北九州昆虫趣味の会々誌, (3): 16.
- 1955 コブノコギリゾウムシ九州に産す. 新昆虫, 8(3): 46.
- 1956 クモゾウムシ類大顎の運動方向. *Pulex* (日本昆虫学会九州支部会報), (9): 35.
- 1956 オリーブゾウムシについて. 森林防疫ニュース, 5(10): 238-240. (+中條道夫)
- 1957 馬場金太郎博士採集の新潟県産象鼻虫類 (第I報). 新潟県の昆虫 第II輯. 市立長岡科学博物館館報, (1957): 24-40. (+中條道夫)
- 1957 日本産チョッキリゾウ亜科の覚書. 筑紫の昆虫, 2(2): 3-13.
- 1957 十字科植物を害する日本産サルゾウ属の研究. 九州大學農學部學藝雜誌, 16(1): 59-74 + 4 pls.  
[Studies on Japanese species of the genus *Ceutorrhynchus* injurious to the cruciferous plants. (Col., Curculionidae).]
- 1958 ベニホシハマキチョッキリ (新称) と日本での分布. 昆虫 [Kontyû], 26(2): 87.
- 1958 広島県産ゾウムシ類. 比和科学博物館研究報告, (2): 7-9. (+中村慎吾)
- 1958 日本新記録のゾウムシ. 昆虫 [Kontyû], 26(3): 156.
- 1958 日本新記録のゾウムシ (2). 昆虫 [Kontyû], 26(4): 186.
- 1958 長崎市付近産鞘翅目目録第5報. ゾウムシ類. 染色体 (長崎東高校生物部), (12): 43-56. (+神谷寛之)
- 1958 シギゾウムシ類の摂食及び産卵行動. 九州病害虫研究会報, 4: 3-4.
- 1958 ヒメコブオトシブミの揺らん作成方法. 北九州の昆虫, 5(3): 12-13.



- 1958 Attelabidae from Shansi, North China (Coleoptera). *Mushi*, 31(3): 25–28. (with H. Kôno)
- 1958 Description of a new species of the genus *Pselaphorhynchites* Schilsky (Col., Attelabidae, Rhynchitinae). *Mushi*, 32(10): 97–100.
- 1958 On the tribe Lobotrachelini from Japan (Col., Curculionidae, Zygopinae). *Insecta Matsumurana*, 22(1/2): 97–100.
- 1959 馬場金太郎博士採集の新潟県産象鼻虫類 (第 III 報). 新潟県の昆虫 第 III 輯. 市立長岡科学博物館館報, (1959): 11–12. (+中條道夫)
- 1959 ツツジの花を食害するゾウムシ. *Pulex* (日本昆虫学会九州支部会報), (21): 84.
- 1959 ミツギリゾウムシ科, オトシブミ科, ホソクチゾウ科, ゾウムシ科. Pp. 74–87 + 1 pl. 彦山昆虫目録 II. 鞘翅目 (安松京三 編), 93 pp. + 4 pls. 九州大学附属彦山生物学研究所, 彦山.  
[In K. Yasumatsu (ed.) *Enumeratio Insectorum Montis Hikosan II*. Coleoptera. 93 pp. + 4 pls. Hikosan Laboratorium Biologicum Universitatis Kyushuensis, Hikosan.]
- 1959 Description of a new species of the genus *Derelomus* Schönherr (Col., Curculionidae), with notes on the biology and immature stages. *Entomological Review of Japan*, 10(2): 46–48.
- 1959 Description of a new species of the genus *Trachyrhinus* Sharp (Coleoptera, Curculionidae). *Japanese Journal of Zoology*, 12(3): 247–250.
- 1959 Curculionid-beetles of Niigata Prefecture collected by Dr. K. Baba (2nd report). *Kontyû*, 27(2): 146–155. (with M. Chûjô)
- 1959 On the genus *Miarus* Stephens from Japan (Col., Curculionidae, Gymnetrinae). *Kontyû*, 27(3): 190–195.
- 1959 Description of a new genus and species of Curculionid-beetles from the Island Okinawa in the Loo-Choo Archipelago. *Akitu* (transactions of the Kyoto Entomological Society), 8(2): 25–29. (with M. Chûjô)
- 1959 Revision of the subfamily Zygopinae from Japan. I. *Akitu* (transactions of the Kyoto Entomological Society), 8(2): 39–42.
- 1960 馬場金太郎博士採集の新潟県産象鼻虫類 (第 V 報). 新潟県の昆虫 第 IV 輯. 市立長岡科学博物館館報, (1960): 16–18. (+中條道夫)
- 1960 オトシブミ科甲虫の葉を巻く習性の起源についての考察 (予報). 北九

- 州の昆蟲, 7(1): 30–31.
- 1960 アカアシチビコフキゾウ日本に産す. 昆蟲 [Kontyû], 28(1): 53.
- 1960 Revision of the subfamily Zygopinae from Japan (Col., Curculionidae). II. Kontyû, 28(2): 110–115; 28(3): 177–183.
- 1960 Anthonominae 亜科の日本新記録のゾウムシ. 昆蟲 [Kontyû], 28(2): 115.
- 1960 Curculionid-beetles from the Hachijô Islands (1). Entomological Review of Japan, 11(1): 2–6. (with M. Chûjô)
- 1960 Revision of the genus *Ixalma* Pascoe from Japan (Col., Curculionidae). Insecta Matsumurana, 23(1): 46–51.
- 1960 Revision of the subfamily Curculioninae from Japan. I (Coleoptera). Mushi, 33(12): 89–104.
- 1960 Curculionidae from Shansi, North China (Coleoptera). Mushi, 34(2): 71–87. (with H. Kôno)
- 1961 日本産ヒゲナガゾウムシの見分け方. 附. 福岡県のヒゲナガゾウムシ. 筑紫の昆虫, 6(1): 1–14 + 3pls.
- 1961 日本産ヒゲナガゾウムシ科雑記. 昆蟲 [Kontyû], 29(1): 81.
- 1961 マツノシラホシゾウムシとその近似種. 九州大學農學部學藝雜誌, 18(3): 253–256. (+安永邦輔)  
[*Cryptorrhynchus insidiosus* Roelofs and its allied species in Japan. (with K. Yasunaga)]
- 1961 コクゾウムシの学名. 植物防疫, 15(8): 365–366.
- 1961 ヒラズネヒゲボソゾウムシについて. 森林防疫ニュース, 10(11): 224–225.
- 1961 On new Curculionidae from Japan (Coleoptera). Kontyû, 29(1): 22–27.
- 1961 Systematic and synonymic notes on Japanese Curculionidae. Kontyû, 29(4): 262–263.
- 1962 森林害虫として記録されているゾウムシ類の種名について. I. マツノシラホシゾウムシ. 林業試験場研究報告, (135): 35–46.  
[Taxonomic revision of weevils injurious to forestry in Japan. I. Bulletin of the Government Forestry Experiment Station, (135): 35–46.]
- 1962 日本産ヒゲナガゾウムシ科, オトシブム科及びミツギリゾウムシ科目録. 九州大學農學部學藝雜誌, 19(2): 159–181.  
[Provisional check list of the families Anthribidae, Attelabidae and Brentidae of

- Japan.]
- 1962 日本産ゾウムシ科目録 (I). 九州大學農學部學藝雜誌, 19(2): 183–217.  
[Provisional check list of the family Curculionidae of Japan. I]
- 1962 日本産ゾウムシ科目録 (II) とオサゾウムシ科目録. 九州大學農學部學藝雜誌, 19(3): 341–368.  
[Preliminary check list of the families Curculionidae (II) and Rhynchophoridae of Japan.]
- 1962 Comparative morphology and phylogeny of the superfamily Curculionoidea of Japan (comparative morphology, phylogeny and systematics of the superfamily Curculionoidea of Japan. I). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University. 11(4): 331–373.
- 1962 Descriptions of a new subfamily, new genera and species of the family Curculionidae of Japan (comparative morphology, phylogeny and systematics of the superfamily Curculionoidea of Japan. II). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 11(4): 375–409.
- 1962 Key to families, subfamilies, tribes, genera of the superfamily Curculionoidea of Japan excluding Scolytidae, Platypodidae and Cossoninae (comparative morphology, phylogeny and systematics of the superfamily Curculionoidea of Japan. III). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 12(1): 21–66.
- 1962 Revision of the subfamily Curculioninae from Japan II (Coleoptera). Mushi, 36(4): 21–40.
- 1962 森林害虫として記録されているゾウムシ類の種名について. II. クスア ナアキゾウムシとその近似種. 林業試験場研究報告, (143): 1–8.  
[Taxonomic revision of weevils injurious to forestry in Japan. II. *Hylobius orientalis* and its allied species. Bulletin of the Government Forestry Experiment Station, (143): 1–8.]
- 1962 森林害虫として記録されているゾウムシ類の種名について. III. サビヒョウタンゾウムシ属. 林業試験場研究報告, (143): 9–14.  
[Taxonomic revision of weevils injurious to forestry in Japan. III. Genus *Scepticus* Roelofs. Bulletin of the Government Forestry Experiment Station, (143): 9–14.]
- 1962 イネゾウムシ属に関する知見. 林業試験場研究報告, (146): 13–31. (+

遠田暢男)

- [Taxonomic and biological studies on the genus *Eteophilus* from Japan. (Coleoptera Curculionidae). Bulletin of the Government Forestry Experiment Station, (146): 13–31. (with N. Enda)]
- 1962 シラホシゾウムシ類3種の見分け方. 森林防疫ニュース, 11(7): 162–164.
- 1963 八重山群島のゾウムシ相概観. Pp. 107–116 + 1 pl. 九大海外学術調査委員会学術報告, 1. 八重山群島学術調査報告第1集. 7 pls. + 160 pp. + 2 maps. 九州大学, 福岡.
- 1963 Coleoptera: Curculionidae. Pp. 149–151. In M. Uéno (eds.), Results of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, 1955, IV. Insect fauna of Afghanistan and Hindukush, Art. VII 166 pp. The Committee of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto.
- 1964 オトシブミの産卵習性の進化. インセクトジャーナル(京浜昆虫同好会), (1): 15–21.
- 1964 Key and illustrations for the identification of the Curculionoid beetles of Japan and the Ryukyus. I. Subfamily Nanophyinae. Kontyû, 32(1): 81–90.
- 1964 Key and illustrations for the identification of the Curculionoid beetles of Japan and the Ryukyus. II. Subfamily Rhynchaeninae. Kontyû, 32(3): 449–456.
- 1965 On some Curculionoid-beetles from Formosa. Contributions to the insect fauna of Formosa I. Results of the Lepidopterological Society of Japan Expedition to Formosa in 1961. Special Bulletin of Lepidopterological Society of Japan, (1): 40–49.
- 1966 Description of a new genus of the tribe Celeuthetini (Col., Curculionidae) from Is. Torishima. Kontyû, 34(2): 141–143.
- 1966 Curculionidae of Afghanistan. Pp. 227–228. In S. Kitamura & R. Yoshii (eds.), Results of Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, 1955, 8. 419 pp. The Committee of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto.
- 1968 ドロノキの花粉を食害するムネビロイネゾウモドキの形態と生態に関する研究. 日本林学会誌, 50(2): 33–37. (+井上元則)
- 1969 ゾウムシ類研究入門 (I). 昆虫と自然, 4(10): 2–7.
- 1970 ゾウムシ類研究入門 (II). 昆虫と自然, 5(1): 30–34.

- 1970 落葉の中にすむゾウムシ. *Nature Study* (大阪市立自然史博物館), 16(1): 4-7.
- 1970 Discovery of the male of *Catapionus gracilicornis* Roelofs. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 43(3): 148-150. (with Y. Takenouchi & K. Baba)
- 1971 野菜類を加害するゾウムシ類の見分け方. *植物防疫*, 25(6): 245-248.
- 1972 A key to the genera of Oriental Anthribidae (Coleoptera). *Bulletin of the Government Forest Experiment Station*, (246): 35-54 + 17 pls.
- 1973 On the genera of Oriental Cossoninae (Coleoptera: Curculionidae). *Bulletin of the Government Forest Experiment Station*, (257): 81-100 + 16 pls.
- 1974 XX-7. 瑞浪コハクに含まれていたシロアリ科とゾウムシ類の化石について (Insecta: Isoptera and Coleoptera Curculionoidea). Pp. 413-414. 瑞浪市化石博物館報告, (1) 開館記念号 {瑞浪の地層と化石}: 475 pp + 115 pls., 瑞浪市科学博物館.
- 1974 オトシブミ類の産卵習性と進化 (上). *週刊世界動物百科* (朝日=ラルース), (174): V-VIII
- 1974 オトシブミの産卵習性と進化 (下). *週刊世界動物百科* (朝日=ラルース), (175): V.
- 1974 日本のオサゾウムシ科. *Pulex* (日本昆虫学会九州支部会報), (55): 223.
- 1975 ゾウムシ類の生活. *インセクトarium*, 12(7): 148-151.
- 1976 On the Japanese species of the family Brentidae (Coleoptera). *Kontyû*, 44(3): 267-282.
- 1976 Notes on the family characters of Apionidae and Brentidae (Coleoptera), with key to the related families. *Kontyû*, 44(4): 469-476.
- 1978 On the genera of Oriental Cryptorhynchinae (Coleoptera: Curculionidae). *Esakia*, (11): 121-143.
- 1978 The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 1. *Esakia*, (12): 17-47.
- 1978 Check-list of the family Rhynchophoridae (Coleoptera) of Japan, with descriptions of a new genus and five new species. *Esakia*, (12): 103-118.
- 1979 果樹を加害するゾウムシ類と対策. *今月の農業*, 23(2): 20-23.
- 1979 日本産ミツギリゾウムシ科概説 (1). *甲虫ニュース*, (46): 1-6.
- 1979 日本産ミツギリゾウムシ科概説 (2). *甲虫ニュース*, (47): 1-5.
- 1979 The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 2. *Esakia*, (14): 1-23.
- 1979 Descriptions of two new species of the family Brentidae from Japan (Coleoptera).

- Esakia, (14): 25–30.
- 1979 新潟県のゾウムシ類目録. 越佐昆虫同好会々報, (50) {新潟県の昆虫 (馬場金太郎 編)} : 25–47.
- 1980 雌雄の見分け方 10, オトシブミ科 (1, 2). インセクタリウム, 17(7): 179; 17(11): 326.
- 1980 ササコクゾウムシの仲間について. 家屋害虫, (7/8): 65–67.
- 1980 The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 3. Esakia, (15): 11–47.
- 1981 Functional morphology and phylogeny of the superfamily Curculionoidea (Coleoptera), Part 1. The mouth parts. Akitu, new series, (34): 1–10.
- 1981 Curculionidae and Rhynchophoridae (Coleoptera) of the Ogasawara Islands. Part 1. Otiorhynchinae and Cryptorhynchinae (1). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 25(4): 175–199.
- 1981 The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 4. Esakia, (17): 53–107.
- 1981 On some Japanese Curculioninae (Coleoptera). Esakia, (17): 109–130.
- 1982 On some Japanese Brentidae (Coleoptera). Entomological Review of Japan, 37(1): 31–36.
- 1982 The family Curculionidae of Japan. I. Subfamily Hylobiinae. Esakia, (19): 51–121.
- 1982 On the subfamilies Magdalinae and Carciliinae of Japan (Coleoptera: Curculionidae). Pp. 153–164. In M. Satô, Y. Hori, Y. Arita & T. Okadome (eds.), Special issue to the memory of retirement of Emeritus Professor Michio Chûjô. II + 185 pp. The Association of the Memorial Issue of Emeritus Professor M. Chûjô, Nagoya.
- 1983 キクイゾウムシ類概説. I. キクイサビゾウムシ類. 家屋害虫, (15/16): 29–36.
- 1983 日本から記載又は記録されてその後とれないゾウムシ類 (1). 北九州の昆蟲, 30(2): 73–76.
- 1983 日本から記載又は記録されてその後とれないゾウムシ類 (2). 北九州の昆蟲, 30(3): 197–200.
- 1983 The family Curculionidae of Japan. II. Viteciinae, subfam. nov. Esakia, (20): 55–62.
- 1983 The family Curculionidae of Japan. III. Subfamily Anopliinae. Esakia, (20): 63–68.

- 1983 Synonymic notes on some Japanese weevils of the families Attelabidae and Curculionidae. *Esakia*, (20): 54.
- 1983 ゾウムシ類の採集法と標本製作法. *昆虫と自然*, 18(7): 11–13.
- 1983 キクイゾウムシ類概説. II. キクイゾウムシ亜科(1). *家屋害虫*, (17/18): 35–41.
- 1984 イネミズゾウムシの分類学上の位置と形態的特徴. *植物防疫*, 38(4): 5–7.
- 1984 The family Curculionidae of Japan. IV. Subfamily Rhynchaeninae. *Esakia*, (22): 5–76.
- 1985 キクイゾウムシ類概説. III. キクイゾウムシ亜科(2). *家屋害虫*, (23/24): 19–28.
- 1985 Weevil fauna of Izu Islands, Japan (Coleoptera). *Mushi*, 50(3): 19–85. (with S. Miyakawa)
- 1985 Supplement to the check-list of the Rhynchophoridae (Coleoptera) of Japan, with descriptions of a new genus and four new species. *Esakia*, (23): 67–76.
- 1985 A revision of the genus *Euops* Schoenherr (Coleoptera: Attelabidae) from Japan, Korea and Taiwan. *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 30(2/3): 175–195. (with Y. Sawada)
- 1986 ゾウムシ類の発音. *月刊むし*, (180): 32.
- 1986 The family Curculionidae of Japan. V. Tribe Camptorhinini. Pp: 321–334. In S. Uéno (ed.) *Entomological papers presented to Yoshihiko Kurosawa on the occasion of his retirement*, V + 342 pp. The Coleopterists' Association of Japan, Tokyo.
- 1986 ルリオトシブミ属から新たに発見された孢子囊と孢子の揺籃への運搬方法(甲虫目:オトシブミ科). *九州大學農學部學藝雜誌*, 40(4): 197–205. (+ 沢田佳久)
- [The mycetangia and the mode of the fungus transmission in the weevil genus *Euops* (Coleoptera: Attelabidae). (with Y. Sawada)]
- 1986 今月の虫. クヌギシギゾウムシ *Curculio robustus*. *インセクタリアム*, 23(8): 225.
- 1986 Notes on some Japanese Anthribidae (Coleoptera). *Papers on entomology presented to Prof. Takehiko Nakane in commemoration of his retirement. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology*, (2): 273–277.

- 1987 New Platypodidae (Coleoptera) from the mountain forests of Papua New Guinea. *Esakia*, (25): 161–181. (with H. Roberts)
- 1987 Larvae of the weevil family Anthribidae of Japan (Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 31(1/2): 71–86. (with C.-Y. Lee)
- 1987 On the homology of the thoracic and abdominal areas of the weevil larvae as based on a study of the muscles (Coleoptera: Curculionoidea). *Esakia*, (25): 141–148. (with C.-Y. Lee)
- 1987 The family Curculionidae of Japan VI. Tribe Mechistocerini Part 1 (Insecta, Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 31: 321–343.
- 1987 The family Curculionidae of Japan VI. Tribe Mechistocerini Part 2 (Insecta, Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 31: 345–364.
- 1987 日本に定着したアルファルフアタコゾウムシ. 環境管理技術 (環境管理技術研究会), 5(5): 257–259.
- 1987 日本に侵入したアルファルフアタコゾウムシ. *ミツバチ科学*, 8(4): 186.
- 1987 フィリピン産バナナの輸入検査で発見される可能性のあるゾウムシ類の検索表 (そのII). *九州植物防疫 (門司植物防疫所)*, (489): 3–4.
- 1988 The family Curculionidae of Japan VII. Genera *Colobodes* Schoenherr, *Deretiosus* Pascoe and *Deretiosopsis* nov. (Insecta, Coleoptera). *Esakia*, (26): 39–70.
- 1988 Larvae of the weevil family Attelabidae of Japan. Part 1. Subfamily Attelabinae (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 32(3/4): 215–237. (with C.-Y. Lee)
- 1988 Larvae of the weevil family Attelabidae of Japan. Part 2. Subfamily Rhynchitinae (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 32(3/4): 239–254. (with C.-Y. Lee)
- 1988 Larvae of the weevil family Curculionidae of Japan. Part 1. Key to genera and the short-nosed group (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 33(1/2): 109–130. (with C.-Y. Lee)
- 1988 Larvae of the weevil family Curculionidae of Japan. Part 2. Hyperinae to Cioninae (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 33(1/2): 131–152. (with C.-Y. Lee)



- 1988 日本へ侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農薬研究 (日本特殊農薬製造株式会社), 35(1): 28–44.
- 1989 今月の虫. カシアシナガゾウムシ *Mecysolobus piceus*. インセクタリウム, 26(1): 10.
- 1992 Curculionidae from Cheju, Korea, with descriptions of three new species (Insecta, Coleoptera). *Esakia*, (32): 1–18. (with C.E. Lee)
- 1992 東アジアのオトシブミ類分類概説. 昆虫と自然, 27(7): 2–17.
- 1993 Revision of the genus *Myosides* Roelofs (Coleoptera, Curculionidae). *Esakia*, (33): 59–86. (with C.E. Lee)
- 1993 日本産土壌ゾウムシ類概説. 昆虫と自然, 28(2): 19–24.
- 1993 韓国済州島の甲虫相—その系統進化と生物地理をめぐって. ゾウムシ類. *Pulex* (日本昆虫学会九州支部会報), (81): 1.
- 1994 Notes on orchid weevils in Japan, with description of a new species (Coleoptera, Curculionidae). *Transactions of the Shikoku Entomological Society*, 20(3/4): 233–241.
- 1994 Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera: Curculionidae) II. Taxonomic treatment of the species of Japan. *Esakia*, (34): 1–73. (with C.W. O'Brien & I.S. Askevold)
- 1994 Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera: Curculionidae), III. Phylogenetic analysis of the species known from Japan. *Esakia*, (34): 75–129. (with I.S. Askevold & C.W. O'Brien)
- 1994 On the systematic position of the genus *Euphyllobiomorphus*: an adelognathous weevil with cylindrical rostrum (Coleoptera, Curculionidae). *Esakia*, (34): 131–146. (with H. Kojima)
- 1994 Taxonomic study of the subfamily Anthonominae from Japan (Coleoptera, Curculionidae). *Esakia*, (34): 147–186. (with H. Kojima)
- 1994 Notes on the Curculionidae from Taiwan 1. *Tachypterellus* (Coleoptera). Memorial issue of the late Dr. Kintaro Baba. *Special Bulletin of the Essa Entomological Society*, (2): 291–297. (with H. Kojima)
- 1994 A revision of the Baridine weevils of the genus *Limnobaris* Bedel (Coleoptera, Curculionidae) from Japan and neighbouring countries. *Japanese Journal of Entomology*, 62(3): 445–456. (with K. Yoshihara)
- 1994 A new genus of the subfamily Baridinae (Coleoptera, Curculionidae) from East

- Asia. Japanese Journal of Entomology, 62(4): 723–729. (with K. Yoshihara)
- 1995 Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* Germar (Coleoptera, Curculionidae) IV. Three new species from Japan. Esakia, (35): 1–15. (with C.W. O'Brien & I.S. Askevold)
- 1995 The family Curculionidae of Japan. VIII. Subfamily Acicnemidinae. Esakia, (35): 17–62. (with S. Miyakawa)
- 1995 Study on the tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) from East Asia I. Descriptions of new species of the genera *Endaeus* and *Endaenidius*. Esakia, (35): 63–102. (with H. Kojima)
- 1995 Study on the tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) from East Asia II. Genus *Imerodes* Marshall. Esakia, (35): 103–112. (with H. Kojima)
- 1995 A new genus and two new species of the edaphic weevils (Coleoptera, Curculionidae) from Japan. Beetles and Nature. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo, (4): 465–473.
- 1995 *Lepidimerodes* gen. nov. (Coleoptera, Curculionidae) with descriptions of three new species. Beetles and Nature. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo, (4): 475–480. (with H. Kojima)
- 1995 The tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) of Japan. I. Genera with six segments in the funicle. Japanese Journal of Entomology, 63(3): 557–571. (with H. Kojima)
- 1995 Two new genera of the tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) with five segments in the funicle. Elytra, Tokyo, 23(2): 133–141. (with H. Kojima)
- 1995 Occurrence of *Derelomus bicarinatus* (Coleoptera, Curculionidae) in Japan and Taiwan. Elytra, Tokyo, 23(2): 142. (with H. Kojima & S. Miyakawa)
- 1995 Systematics of the weevil genus *Gryporrhynchus* Roelofs (Coleoptera, Curculionidae). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 40(1–2): 117–134. (with H. Kojima)
- 1996 On the genera of the Oriental Baridinae (Coleoptera, Curculionidae). Esakia, (36): 1–59. (with K. Yoshihara)
- 1996 Systematics of the flea weevils of the tribe Ramphini (Coleoptera, Curculionidae) from East Asia, I. Descriptions of new taxa and distribution data of some species. Esakia, (36): 61–96. (with S. Miyakawa)
- 1996 Systematics of the flea weevils of the tribe Ramphini (Coleoptera,

- Curculionidae) from East Asia, II. Phylogenetic analysis and higher classification. *Esakia*, (36): 97–134. (with H. Kojima)
- 1996 Larvae of the weevil family Curculionidae of Japan. Part 3. Ramphinae to Curculioninae (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 40(3/4): 287–306. (with C.-Y. Lee)
- 1996 Larvae of the weevil family Curculionidae of Japan. Part 4. Ceutorhynchinae to Molytinae (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 40(3/4): 307–331. (with C.-Y. Lee)
- 1996 Larvae of the weevil family Curculionidae of Japan. Part 5. Cryptorhynchinae (Insecta: Coleoptera). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 40(3/4): 333–358. (with C.-Y. Lee)
- 1996 今月の虫。エゴシギゾウムシ *Curculio styracis*. *インセクトリウム*, 33(5): 143.
- 1996 今月の虫。カツオゾウムシ *Lixus impressiventris*. *インセクトリウム*, 33(10): 292.
- 1996 The tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) of Japan II. Genus *Ochyromera* Pascoe. *Japanese Journal of Entomology*, 64(3): 570–586. (with H. Kojima)
- 1996 The tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) of Japan III. Genera with seven segments in the funicle and key to genera. *Japanese Journal of Entomology*, 64(3): 570–586. (with H. Kojima)
- 1997 *Calypptopygus kumei* (Coleoptera, Curculionidae), a new species of Baridine weevil from Japan and Taiwan. *Elytra*, Tokyo, 25(1):1–5. (with K. Yoshihara).
- 1997 Occurrence of *Anthinobaris shirozui* (Coleoptera, Curculionidae) in the Ryukyu Islands, Southeast Japan. *Elytra*, Tokyo, 25(1): 5–6. (with K. Yoshihara).
- 1998 Two new species of the genus *Ochyromera* (Coleoptera: Curculionidae) from Japan. *Esakia*, (38): 113–122. (with H. Kojima)
- 1998 New *Imathia* from Japan and Taiwan (Coleoptera, Curculionidae, Curculioninae, Storeini). *Entomological Science*, 1(2): 249–255. (with H. Kojima)
- 1999 今月の虫。ヒメシロコブゾウムシ *Dermatoxenus caesicollis*. *インセクトリウム*, 36(6): 171.
- 1999 A new species of the genus *Trigonorhinus* from Japan (Coleoptera: Anthribidae). *Entomological Review of Japan*, 54(1): 60–64.

- 1999 サツマイモを加害するゾウムシ類の見分け方. こうち 21 世紀をひらく「くらしと農業」(高知県農業改良普及協会), 13(2): 39-42.
- 1999 Two new species and two newly recorded species of Anthribidae (Coleoptera) from Korea. *Journal of Asia-Pacific Entomology*, 2(2): 97-103. (with S.-W. Park).
- 1999 Systematic notes on the genus *Tanysphyrus* with description of a related new genus (Coleoptera, Curculionidae). *Entomological Review of Japan*, 54(2): 81-95. (with H. Kojima).
- 1999 *Araecerus levipennis* new to the fauna of Japan (Coleoptera, Anthribidae). *Entomological Review of Japan*, 54(2): 96.
- 2000 On a collection of Curculionidae (Coleoptera) from Kamchatka and the Northern Kuriles. *Natural History Research. Special Issue, Chiba*, (7): 126-131.
- 2000 Systematics of the genus *Sphinxis* Roelofs (Coleoptera: Curculionidae). *Entomological Science*, 3(3): 529-556. (with H. Kojima).
- 2001 Notes on the weevil genus *Trachodes* in Japan (Coleoptera: Curculionidae: Acicnemidini). *Sukunahikona. Special publication of the Japan Coleopterological Society, Osaka*, (1): 287-292.
- 2001 ギンネムヒゲナガゾウムシの分布拡大と色彩型の割合. 北九州の昆虫, 48(2): 76.
- 2001 自然教育園の土壌昆虫相(2)ゾウムシ上科. 自然教育園報告, (33): 313-321. (+野村周平)
- 2001 Isopterina, a new subtribe of the tribe Celeuthetini, with notes on the related taxa (Coleoptera, Curculionidae). *Elytra, Tokyo*, 29(2): 265-283. (with H. Kojima)
- 2002 福井県の土壌ゾウムシ類(第1報). 福井虫報, (30): 13-15. (+保科英人)
- 2002 Study on the Malaysian *Pinacopus* (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae). *Nabesania. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo*, (5): 425-445. (with H. Kojima).
- 2002 *Watanabezo*, a new genus of the Cryptorhynchini (Coleoptera, Curculionidae) from the Ogasawara Isls., Japan. *Nabesania. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo*, (5): 447-452.
- 2002 A new *Thamnobius*: an African weevil genus new to the Oriental region (Coleoptera: Curculionidae; Curculioninae). *Entomological Science.*, 5(3): 335-339. (with H. Kojima).

- 2002 (2001年度学会賞受賞論文) ツブゾウムシ属 (コウチュウ目:ゾウムシ科) の分類解説. 昆虫 (ニューシリーズ), 5(3): 81-87. (十小島弘昭).
- 2003 *Satozo*, a new genus of the Celeuthetini (Coleoptera, Curculionidae) from Minami-Iwojima Is., Japan. Satonius. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo, (6): 397-403. (with H. Kojima)
- 2003 Notes on the apterous weevil genus *Pinacopus* Marshall (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae). Satonius. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, Tokyo, (6): 405-413. (with H. Kojima)
- 2003 Synonymic and faunistic notes on some weevils in Japan (Coleoptera: Curculionoidea). Entomological Review of Japan, 58(1): 53-66. (with H. Kojima)
- 2003 Morphologic characters of the weevil head and phylogenetic implications (Coleoptera: Curculionoidea). Esakia, (43): 133-169. (with H. Kojima)
- 2003 Resource use of insect seed predators during general flowering and seeding events in a Bornean dipterocarp rain forest. Bulletin of Entomological Research, 93(5): 455-466. (with M. Nakagawa, T. Itioka, K. Momose, & other eight authors)
- 2003 A new *Lignyodes* Dejean, a new representative of the genus and the tribe Lignyodini from the Eastern Palaearctic region (Coleoptera: Curculionidae). The Coleopterists Bulletin, 57(4): 383-389. (with H. Kojima)
- 2003 ゾウムシ雑録 (1) オオゾウムシ. 象鼻虫 [Zou-Mushi], (2): 9-10.
- 2004 Systematic position of the tribe Phylloplatypodini, with remarks on the definitions of the families Scolytidae, Platypodidae, Dryophthoridae and Curculionidae (Coleoptera: Curculionoidea). Esakia, (44): 153-168. (with H. Kojima)
- 2004 Systematic position of the genus *Keibaris* Chûjô, with notes on the definition of the related taxa having the ascended mesepimera (Coleoptera: Curculionidae). Esakia, (44): 169-182. (with H. Kojima & K. Yoshihara)
- 2004 Synonymic notes on Japanese Ceutorhynchinae (Coleoptera, Curculionidae). Elytra, Tokyo, 32(19): 233-234. (with H. Yoshitake)
- 2004 ゾウムシ雑録 (2) シロコブゾウムシとヒメシロコブゾウムシ. 象鼻虫 [Zou-Mushi], (4): 17-18.
- 2004 日本産ゾウムシ上科のオンライン目録とデータベース. 九州大学総合研

- 究博物館研究報告, (2): 33–147. (+小島弘昭)
- [An online checklist and database of the Japanese weevils (Insecta: Coleoptera: Curculionoidea) (excepting Scolytidae and Platypodidae). Bulletin of the Kyushu University Museum, (2): 33–147. (with H. Kojima)]
- 2005 赤坂御用地ならびに常盤松御用地の土壤性ゾウムシ相. 国立科学博物館専報, 39: 173–181. (+野村周平)
- 2005 Weevils of the tribe Acalyptini (Coleoptera: Curculionidae: Curculioninae): redefinition and a taxonomic treatment of the Japanese, Korean and Taiwanese species. *Esakia*, (45): 69–115. (with H. Kojima)
- 2005 Three additional species of Brentidae (Coleoptera: Curculionoidea) to the fauna of Japan. *Elytra*, Tokyo, 33(1): 126–133. (with H. Kojima).
- 2006 Curculionoidea: general introduction and Curculionidae: Entiminae (Part 1). Phyllobiini, Polydrusini and Cyphicerini (Coleoptera). *The Insects of Japan*, 3. 406 pp. (incl. 898 figs.). Touka Shobo, Fukuoka. (with H. Kojima & S. Miyakawa)
- (ゾウムシ上科概説・ゾウムシ科 (1). 日本の昆虫, 3.)
- 2006 Larva of *Desmidophorus crassus* and the systematic position of the Desmidophorini (Coleoptera: Curculionoidea). *Esakia*, (46): 89–100. (with H. Kojima)
- 2006 ゾウムシと吻. *昆虫と自然*, 41(6): 2–4. (※図の位置に印刷ミス)
- 2006 吻の形態と機能. *昆虫と自然*, 41(6): 5–10. (※図の位置に印刷ミス)
- 2007 Taxonomic notes on the tribe Mecysolobini (Coleoptera, Curculionidae), with descriptions of three new taxa from Japan. *Elytra*, Tokyo, 35(1): 226–237. (with H. Kojima)
- 2007 The tribes Ottistirini and Viticini (Coleoptera, Curculionidae) from the island of Lanshu, Taiwan. *Elytra*, Tokyo, 35(1): 238–245. (with H. Kojima)
- 2007 Weevils of the genus *Smicronyx* in Japan (Coleoptera: Curculionidae). *Entomological Review of Japan*, 62(1): 1–9. (with H. Kojima)
- 2007 Notes on the flea weevil genus *Orchestes* in Japan (Coleoptera: Curculionidae: Rhamphini). *Entomological Review of Japan*, 62(1): 27–40. (with H. Kojima)
- 2008 ミツギリゾウムシ科研究入門 (1) 一概説と日本産の種一. 月刊むし, (443): 4–16.
- 2008 Micronesian weevils (Coleoptera: Curculionoidea) 1. Anthribidae: Key to genera

- and tribe Jordanthribini. Taichius. Special publication of the Japan Coleopterological Society, Osaka, (2): 467–499.
- 2009 Weevils of the genus *Leptanchonus* of Japan (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae). Japanese Journal of Systematic Entomology, 15(1): 133–145.
- 2009 Addition to the genus *Smicronyx* of Japan (Coleoptera: Curculionidae). Entomological Review of Japan, 64(1): 67–72. (with I. Matoba)
- 2009 A new species of *Cobalocephalus* (Coleoptera: Brentidae) from Japan. Entomological Review of Japan, 64(2): 287–291.
- 2011 Weevils of the genus *Protacalles* and its allies in Japan (Coleoptera: Curculionidae: Molytinae) (Part 1). Masumushi. Special publication of the Japanese Society of Scarabaeoidology, (1): 325–336.
- 2011 日本のシギゾウムシ類. 昆虫と自然, 46(5): 2–3.
- 2011 日本産シギゾウムシ類の概説. 昆虫と自然, 46(5): 3–15.
- 2014 ゾウムシ上科 (1) 分類に用いる形態. 連載: 甲虫の幼虫図鑑. 昆虫と自然, 49(14): 29–32.
- 2014 On the myrmecophilous genus *Systellus* Kleine (Coleoptera: Brentidae), with systematic and biological notes on *S. mentaweicus* (Senna). Raffles Bulletin of Zoology, 62: 805–811. (with M. Maruyama, L. Bartolozzi, W. Sakchoowong, & R. Hashim)
- 2015 ゾウムシ上科 (2) 科の検索表とヒゲナガゾウムシ科. 連載: 甲虫の幼虫図鑑. 昆虫と自然, 49(14): 21–25.
- 2015 ゾウムシ上科 (3) オトシブミ科. 連載: 甲虫の幼虫図鑑. 昆虫と自然, 50(5): 34–39.
- 2015 ゾウムシ上科 (4) チョッキリゾウムシ科. 連載: 甲虫の幼虫図鑑. 昆虫と自然, 50(8): 29–32.
- 2015 ゾウムシ上科 (5) ゾウムシ科: 高次分類. 連載: 甲虫の幼虫図鑑. 昆虫と自然, 50(11): 23–26.
- 2015 A new species of *Pempherulus* Marshall (Coleoptera, Curculionidae, Conoderinae) associated with coastal hibiscus from the Ryukyu, Southwest Japan. Elytra, Tokyo, (new series), 5(1): 263–268. (with H. Kojima)
- 2015 Curculionidae: Entiminae (Part 2) (Coleoptera). The Insects of Japan, 4. 758 pp. (incl. 373 figs.). Touka Shobo, Fukuoka. (with T. Nakamura & K. Kannô)  
(ゾウムシ科 クチブトゾウムシ亜科 (2). 日本の昆虫, 4.)

- 2016 東北地方と新潟県の湿原に産するシラヒゲミズギクゾウムシの生態. 月刊むし, (548): 29–32. (+佐藤隆志)
- 2016 日本新記録オオダイコンサルゾウムシ (新称) の分布と生態. 月刊むし, (548): 38–40. (+城戸克弥)
- 2016 Flightless litter dwelling *Cotasterosoma* (Coleoptera: Curculionidae: Cossoninae) found outside of Japan, with mtDNA phylogeography of a new species from Southwest China. Zootaxa, 4179(1): 133–138. (with V.V. Grebennikov)
- 2017 On some species of Brentidae in Japan (Coleoptera, Brentidae). Elytra, Tokyo, (new series), 7(2): 483–490. (with N. Tsuji)
- 2018 A taxonomic note on *Shirahoshizo japonicus* (Zumpt, 1932) (Coleoptera: Curculionidae: Cryptorhynchinae). Japanese Journal of Systematic Entomology, 24(2): 322–323. (with N. Tsuji & T. Hirowatari)
- 2019 A new record of *Shirahoshizo juglandis* Zherichin (Coleoptera, Curculionidae, Cryptorhynchinae) from Japan, with a biological note on its host plant association. Elytra, Tokyo, (new series), 9(1): 151–153. (with N. Tsuji & T. Hirowatari)
- 2021 Diversification, selective sweep, and body size in the invasive Palearctic alfalfa weevil infected with *Wolbachia*. Scientific Reports, 11(1): e9664. (with M. Tsuda, S. Iwase, K. Kébé, & other six authors)

## II シロアリに関する研究

- 1963 白蟻の進化と日本産の種の占める位置. しろあり, 東京, (2): 9–15.
- 1964 シロアリ研究の現状 (1). 生物科学 [Biological science], 東京, 18(3): 106–110.
- 1964 シロアリ防除ダイジェスト. 140 pp. 全日本しろあり対策協会. (分担執筆, pp. 9–37)
- 1965 シロアリの生態. 材料 (日本材料学会), 14(143): 634–637.
- 1965 シロアリに関する基礎知識. I. シロアリと原生動物. しろあり, 東京, (4): 33–37.
- 1965 シロアリの飼い方. インセクタリウム, 2(11): 4–5.
- 1966 東南アジアにシロアリを訪ねて. しろあり, 東京, (5): 1–4.
- 1966 ヤマトシロアリについて (予報). しろあり, 東京, (6): 18–23.



- 1966 時の話題 シロアリ. 場報 (農林省林業試験場調査部調査広報課), (28): 2-3.
- 1967 シロアリの分布. しろあり, 東京, (7): 7-11.
- 1968 小笠原諸島のシロアリ. しろあり, 東京, (8): 2-3.
- 1968 シロアリの文献目録 (I). しろあり, 東京, (8): 39-47.
- 1968 Termites of the genus *Reticulitermes* of Japan and Taiwan. Bulletin of the Government Forest Experiment Station, (217): 43-73.
- 1968 シロアリ防除ダイジェスト (改定版). 163 pp. 日本しろあり対策協会, 東京. (分担執筆, pp. 9-49)
- 1969 ヨーロッパのシロアリ事情. しろあり, 東京, (11): 14-18.
- 1970 日本のシロアリ類—その生態と防除. 植物防疫, 24(1): 2-6.
- 1971 シロアリによる家屋等の被害. バイオテク (講談社), 2(12): 970-973.
- 1973 Termites from Thailand. Bulletin of the Government Forest Experiment Station, (257): 57-80.
- 1973 *Glyptotermes nakajimai*, a new termite from Japan (Isoptera: Kalotermitidae). Kontyû, 41(4): 470-474.
- 1973 シロアリ防除ダイジェスト (再改定版). 220 pp. 日本しろあり対策協会, 東京. (分担執筆, pp. 10-57)
- 1975 Biology of the termites in the Far East. Review of Plant Protection Research, 8: 29-40.
- 1974 瑞浪コハクに含まれていたシロアリ科とゾウムシ類の化石について. 瑞浪市化石博物館館報, (1): 413-414.
- 1974 日本の *Glyptotermes* 属シロアリについて. しろあり, 東京, (22): 22-24.
- 1974 シロアリの分類 I. 世界のシロアリの属への検索表. しろあり, 東京, (23): 7-38 + 138 figs.
- 1975 シロアリの分類 II. 東南アジア主要属の種類 (1). しろあり, 東京, (24): 49-58.
- 1976 シロアリの分類 II. 東南アジア主要属の種類 (2). しろあり, 東京, (25): 23-35.
- 1976 Termites from Malaya. Nature and Life in Southeast Asia, Kyoto, 7: 323-326.
- 1976 シロアリの社会. 遺伝 (裳華房), 30(4): 19-26.
- 1976 シロアリの分類 III. 日本産シロアリについての覚書. しろあり, 東京, (26): 18-20.

- 1979 日本および東南アジアのシロアリとその防除. 研究ジャーナル (農林水産技術), 2(3): 30–34.
- 1981 シロアリとその被害. 瀬戸内住宅情報 (大和出版), (11): 93–95.
- 1981 仙台で発見されたアメリカオオシロアリ. しろあり, 東京, (45): 33–34.
- 1981 巻頭言: シロアリ研究の面白さ. しろあり, 東京, (47): 1.
- 1984 アメリカカンザイシロアリについて. 環境管理技術 (環境管理技術研究会), 2(2): 91–93.
- 1993 A new record of *Coptotermes guangzhouensis* (Isoptera, Rhinotermitidae). Japanese Journal of Entomology, 61(2): 250. (with Y. Takematsu)
- 1994 シロアリ研究の現状. しろあり, 東京, (98): 3–7.
- 1998 小笠原のシロアリ. しろあり, 東京, (112): 3–10.
- 1998 第6章 各支部の沿革と活動の経緯, 第7節 九州支部. Pp. 130–133. 創立四十年誌, 239 pp. 社団法人日本しろあり対策協会, 東京.
- 1999 九州支部の現状. しろあり, 東京, (115): 54–57.
- 2000 カンモンシロアリについて. しろあり, 東京, (121): 3–8.
- 2000 硫黄島のシロアリ調査. しろあり, 東京, (121): 40–45. (+児玉純一, 日比野士朗)
- 2000 日本へ侵入したアメリカオオシロアリ属 *Zootermopsis* について. しろあり, 東京, (122): 3–8.
- 2000 南鳥島のシロアリ調査とフィリピンイエシロアリの定着. しろあり, 東京, (122): 9–17. (+石井勝洋)
- 2000 第1章 シロアリ. Pp. 1–126. シロアリと防除対策 (社団法人日本しろあり対策協会編), xii+389 pp. 東京.
- 2001 中古住宅のシロアリ被害検査・診断マニュアル. 12 pp.+37 figs. 社団法人日本しろあり対策協会, 東京.
- 2001 中国と日本のシロアリ. しろあり, 東京, (126): 3–8.
- 2001 平成13年度しろあり防除施工士資格検定第2次 (実務) 試験の講評. しろあり, 東京, (126): 45–51.
- 2002 第44回社団法人日本しろあり対策協会全国大会シンポジウム: イエシロアリ要旨. しろあり, 東京, (127): 20–40. (分担: I. なぜイエシロアリか: 20–22)
- 2002 平成14年度しろあり防除施工士資格検定第1次 (学科) 試験の講評. しろあり, 東京, (129): 43–51.

- 2002 平成 14 年度しろあり防除施工士資格検定第 2 次（実務）試験の講評。しろあり，東京，(130): 49-55.
- 2002 第 2 章 シロアリの生態と被害，Pp. 11-34. しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2002 年版，183 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.
- 2002 第 2 章 既存住宅のシロアリ被害調査に必要な基礎知識。Pp. 37-43；第 3 章 既存住宅のシロアリ被害検査・診断マニュアル。Pp. 47-67. 蟻害及び腐朽の検査・診断手法（蟻害・腐朽検査員研修用テキスト），175 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.
- 2002 住宅の乾材害虫とシロアリの被害診断。2003 年度日本木材学会生物劣化研究会講演要旨集「住宅性能評価—腐朽・蟻害診断の現況と展望—」:26-32.
- 2003 第 2 章 シロアリの生態と被害。Pp. 11-34. しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2003 年版，183 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.
- 2004 第 2 章 シロアリの生態と被害。Pp. 11-34. しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2004 年版，183 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.
- 2004 蟻害及び腐朽の検査・診断手法（蟻害・腐朽検査員研修用テキスト）。192 pp. 社団法人日本しろあり対策協会。（分担：第 2 章 既存住宅のシロアリ被害調査に必要な基礎知識；第 3 章 既存住宅のシロアリ被害検査・診断マニュアル。35-69.）
- 2004 乾材シロアリと防除対策の現状。しろあり，東京，(136): 13-18.
- 2005 第 2 章 シロアリの生態と被害。Pp. 11-34. しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2005 年版，183 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.
- 2005 乾材シロアリの防除をめぐるその後の情報。しろあり，東京，(139): 15-17.
- 2005 平成 16 年度しろあり防除士資格検定第 2 次（実務）試験の講評。しろあり，東京，(139) : 42-47.
- 2005 小笠原におけるダイコクシロアリの加害生態。しろあり，東京，(142): 15-18.
- 2006 第 2 章 シロアリの生態と被害。Pp. 11-37. しろあり及び腐朽防除施工

- の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2006年版，199 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京。
- 2006 シロアリ類. 特集 温暖化？ヒートアイランド？分布拡大する昆虫たち. 生活と環境（財団法人日本環境衛生センター），51(10)：26-28.
- 2007 乾材シロアリとその防除対策に関する報告書. しろあり，東京，(147)：11-24.（乾材シロアリ対策特別委員会：委員長として取りまとめ）
- 2007 第2章 既存住宅のシロアリ被害調査に必要な基礎知識；第3章 既存住宅のシロアリ被害検査・診断マニュアル Pp. 31-56. 蟻害及び腐朽の検査診断手法，220 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京。
- 2007 蟻害・腐朽検査員のための現場調査補助写真集，56 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京。
- 2007 第2章 シロアリの生態と被害. Pp. 11-37. しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2007年版，199 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京。
- 2008 第2章 シロアリの生態と被害. Pp. 11-37. しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2008年版，199 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京。
- 2009 創立50年誌. iii-xi+203 pp.+1 DVD. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.（分担執筆：編集責任者）
- 2009 乾材シロアリの防除法および諸規程，17 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.（取りまとめ：乾材シロアリ対策特別委員会委員長）
- 2009 アメリカカンザイシロアリの生態と防除法. 木材保存，35(2):44-51.
- 2010 第2章 シロアリの生態と被害: 11-40. 執筆しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識（防除施工士受験テキスト）2011年版. 199 pp. 社団法人日本しろあり対策協会.
- 2011 しろありルールブック，66 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.（分担執筆）
- 2011 文化財建造物の蟻害虫腐朽検査マニュアル，96 pp. 社団法人日本しろあり対策協会，東京.（分担執筆）

### III まつくいむしに関する研究

- 1969 マーキング法によるシラホシゾウ類の個体数推定法 (I). 日本林学会九州支部研究論文集，(23): 170-172.（+岩崎 厚，堀田 隆）

- 1969 シラホシゾウムシ類の分散能力. 日本林学会九州支部研究論文集, (23): 173-174. (+岩崎 厚, 堀田 隆)
- 1969 マツクイムシの寄主選択 (1). 日本林学会九州支部研究論文集, (23): 174-176. (+中野 毅, 岩崎 厚)
- 1969 マーキング法によるシラホシゾウムシ類の個体数推定法 (II). マツノシラホシゾウムシに対する Jackson 正の方法の適用. 林業試験場九州支場年報, (12): 71.
- 1969 マーキング法によるクロコブゾウムシの個体数推定. 林業試験場九州支場年報, (12): 76. (+岩崎 厚)
- 1970 松くい虫の寄主選択と密度推定. 森林防疫, 19(6): 149-151.
- 1970 マーキング法によるクロカミキリの個体数推定. 日本林学会九州支部研究論文集, (24): 181-182. (+岩崎 厚, 倉永善太郎) [林業試験場九州支場年報, (13): 101 (1971)]
- 1970 シラホシゾウムシ類の移動を遮断する試み (I). 日本林学会九州支部研究論文集, (24): 183-184. (+岩崎 厚)
- 1970 高さを違えた餌木に対するシラホシゾウムシ類の集まり方. 日本林学会九州支部研究論文集, (24): 185-187. (+岩崎 厚)
- 1970 マツノマダラカミキリの産卵対象木. 日本林学会九州支部研究論文集, (24): 178-188. (+岩崎 厚)
- 1970 誘引剤によるクロカミキリの日週活動と蔵卵数. 日本林学会九州支部研究論文集, (24): 189-190. (+倉永善太郎, 岩崎 厚)
- 1971 シラホシゾウムシ類の餌木への接近方法と産卵部位. 林業試験場九州支場年報, (13): 104. (+岩崎 厚)
- 1971 マツノマダラカミキリによるマツノザイセンチュウの伝播. 日本林学会九州支部研究論文集, (25): 165-166. (+岩崎 厚)
- 1971 まつくいむしの産卵対象木. 日本林学会九州支部研究論文集, (25): 168-169. (+岩崎 厚)
- 1971 シラホシゾウムシ類の行動におよぼす気象の影響. 日本林学会九州支部研究論文集, (25): 169-171. (+岩崎 厚) [林業試験場九州支場年報, (14): 94 (1972) ]
- 1971 マーキング法によるシラホシゾウムシ類の密度推定 III. 日本林学会九州支部研究論文集, (25): 171-173. (+岩崎 厚)
- 1972 マツノザイセンチュウ伝播者の探索とマツ樹体内への侵入経路. 第 83

- 回日本林学会大会講演集：326-327. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリ後食数とマツ枯損の関係. 第 83 回日本林学会大会講演集：327-329. (＋岩崎 厚) [林業試験場九州支場年報, (14): 5]
- 1972 マツノマダラカミキリに関する研究 (IV) —蛹室をめぐるカミキリと材線虫の生態—. 日本林学会九州支部研究論文集, (26): 199-200. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリの後食予防によるマツ類枯損防止試験 (I) —後食防止必要期間の推定—. 日本林学会九州支部研究論文集, (26): 201-202. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリの後食予防によるマツ類枯損防止試験 (II) —予防剤のスクリーニング・テスト法—. 日本林学会九州支部研究論文集, (26): 203-204. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリに関する研究 (I) —羽化脱出から餌木に集まるまでの期間—. 日本林学会九州支部研究論文集, (26): 205. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリに関する研究 (II) —産卵痕からの密度推定—. 日本林学会九州支部研究論文集, (26): 207-208. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリに関する研究 (III) —マツ異常木の出現時期の違いがカミキリの産卵数にあたえる影響—. 日本林学会九州支部研究論文集, (26): 209-210. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノザイセンチュウ伝播者としてのマツノマダラカミキリの役割. 日本林学会誌, 54(6): 177-183. (＋岩崎 厚)
- 1972 最近におけるマツクイムシ研究の進展 (II). 日本林学会九州支部研究論文集, シンポジウム, (26): 8-14.
- 1972 マツノザイセンチュウ伝播者の探索. 林業試験場九州支場年報, (14): 2. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノマダラカミキリの材線虫保持率と虫体からの離脱. 林業試験場九州支場年報, (14): 3. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツノザイセンチュウのマツ樹体内への侵入経路. 林業試験場九州支場年報, (14): 4. (＋岩崎 厚)
- 1972 餌木巻付法によるマツノマダラカミキリとシラホシゾウ類の健全木に対する産卵. 林業試験場九州支場年報, (14): 93. (＋岩崎 厚)
- 1972 マツの枯れる原因—虫から線虫病へ研究の発展. インセクタリアム, 9(12): 16-19.

- 1973 九州地区試験研究機関共同で行ったマツノマダラカミキリ後食予防試験について. 森林防疫, 22(1): 17-18. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリの後食予防必要期間の推定. 森林防疫, 22(1): 19-20. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリ後食予防剤のスクリーニングテスト. 森林防疫, 22(1): 40-45.
- 1973 マツノマダラカミキリの後食予防試験. 森林防疫, 22(1): 18-19.
- 1973 マツノザイセンチュウとまつくい虫をめぐる諸問題. 植物防疫, 27(5): 175-179.
- 1973 マツノマダラカミキリに関する研究 V—産卵時期と羽化時期の関係—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 175-176. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリに関する研究 VI—羽化直後および餌木反応個体の後食木停留率—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 177. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリに関する研究 VII—餌木を用いての分布と分散の調査—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 179-180. (+倉永善太郎, 吉田成章, 岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリに関する研究 VIII—マーキング法による個体数推定(第1報)—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 181-182. (+吉田成章, 倉永善太郎, 岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリに関する研究 IX—後食量に及ぼす温度の影響—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 183.
- 1973 マツノマダラカミキリの後食予防によるマツ類枯損防止試験 III—カミキリの保線虫数からみた後食予防必要期間の推定—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 193. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリの後食予防によるマツ類枯損防止試験 IV—低濃度地上散布による試験—. 日本林学会九州支部研究論文集, (27): 195-196. (+岩崎 厚, 三角園茂志)
- 1973 マツノザイセンチュウによるマツ類枯損の防止法. 今月の農薬, 17(12): 40-43.
- 1973 マツノマダラカミキリの羽化脱出から餌木に集まるまでの期間. 林業試験所九州支場年報, (15): 2. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリの産卵痕からの密度推定. 林業試験所九州支場年

報, (15): 3. (+岩崎 厚)

- 1973 マツノマダラカミキリとマツノザイセンチュウの相互関係. 林業試験場九州支場年報, (15): 4-5. (+岩崎 厚)
- 1973 マツノマダラカミキリの後食予防によるマツ枯損防止試験. 林業試験場九州支場年報, (15): 6-7. (+岩崎 厚)
- 1974 マツノザイセンチュウの生態と寄生性. 第85回日本林学会大会講演集: 10-12. (+徳重陽山, 清原友也など他3名)
- 1974 マツノマダラカミキリに関する研究 X. 幼虫の脱皮回数. 第85回日本林学会大会講演集: 227-228. (+岩崎 厚)
- 1974 マツノマダラカミキリに関する研究 XI. 羽化率に対する密度効果. 第85回日本林学会大会講演集: 229-300. (+岩崎 厚)
- 1974 マツノマダラカミキリの生態と防除. 林業試験場九州支場年報, (16): 4-5. (+岩崎 厚, 倉永善太郎, 吉田成章)
- 1975 マツノマダラカミキリに関する研究 XII—誘引剤による誘引経過と保線虫数—. 日本林学会九州支部研究論文集, (28): 197-198. (+岩崎 厚)
- 1975 マツノマダラカミキリに関する研究 XIII—誘引器周辺でカミキリの後食数が多くなる範囲—. 日本林学会九州支部研究論文集, (28): 197-198. (+岩崎 厚)
- 1975 マツノマダラカミキリに関する研究 XIV—停留率と温度の関係—. 日本林学会九州支部研究論文集, (28): 199-200. (+岩崎 厚, 谷口 明)
- 1975 マツノマダラカミキリに関する研究 XV—マーキング法による個体数推定(第2報)—. 日本林学会九州支部研究論文集, (28): 201-202. (+岩崎 厚, 吉田成章, 谷口 明)
- 1975 マツはなぜかれる. 月刊教育ジャーナル(学習研究社), 13(15): 30-31.
- 1975 マツノマダラカミキリに関する研究(XVI)—個体数変動要因の解析(1)—. 第86回日本林学会大会講演集: 319-320. (+岩崎 厚)
- 1975 マツノマダラカミキリに関する研究(XVII)—熊本県下での海拔高と被害分布の関係調査例—. 第86回日本林学会大会講演集: 321-322. (+岩崎 厚, 田呂丸一太, 滝下国利)
- 1975 マツノマダラカミキリの個体数変動要因. 森林防疫, 24(10): 15-17.
- 1975 マツノマダラカミキリの生態と防除. 林業試験場九州支場年報, (17): 4-5. (+岩崎 厚, 倉永善太郎, 吉田成章)



- 1976 マツノマダラカミキリに関する研究 (XVIII) —予防散布と誘引剤併用による誘殺効果—. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 195–196. (+岩崎 厚, 吉田成章)
- 1976 マツノマダラカミキリに関する研究 (XX) —各地産成虫の死亡率—. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 197–198. (+岩崎 厚)
- 1976 マツノマダラカミキリに関する研究 (XIX) —マーキング法による誘引剤の効果推定—. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 199–200. (+岩崎 厚)
- 1976 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXI) —産卵痕の分布—. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 201–202. (+岩崎 厚, 讃井孝義)
- 1976 マツノマダラカミキリの個体数変動要因. 森林防疫, 25(12): 195–198.
- 1976 マツノマダラカミキリの生態と防除. 林業試験場九州支場年報, (18): 4–5. (+岩崎 厚, 倉永善太郎, 吉田成章)
- 1977 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXII) —飼育容器内での後食量—. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 221–222. (+岩崎 厚)
- 1977 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXIII) —浸漬による被害木駆除試験—. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 223–224. (+岩崎 厚, 今給黎靖夫)
- 1977 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXIV) —スラッシュマツに対する産卵経過—. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 225–226. (+岩崎 厚, 今給黎靖夫)
- 1977 アカマツ, クロマツ, テーダマツに対するマツノマダラカミキリの後食選択性. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 229–230. (+大山浪雄, 吉田成章)
- 1977 マツノマダラカミキリに関する研究 XXV. 熊本県下激害林での枯損推移. 88回日本林学会大会講演集: 281–282. (+岩崎 厚, 田呂丸一太, 滝下国利)
- 1977 マツ 3 樹種に対するマツノマダラカミキリの後食選択性. 林業試験場九州支場年報, (19): 4. (+大山浪雄)
- 1977 小型容器で個体飼育したマツノマダラカミキリの後食量. 林業試験場九州支場年報, (19): 33. (+岩崎 厚)
- 1977 マツノマダラカミキリ越冬幼虫の浸漬による駆除試験. 林業試験場九州支場年報, (19): 34. (+岩崎 厚)

- 1978 マツノマダラカミキリ誘引剤の効果的利用法の検討. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 247-248. (+牧野豊吉, 倉永善太郎, 岩崎 厚, 吉田成章) [林業試験場九州支場年報, (20): 43-44]
- 1978 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXVI) —島原市眉山国有林でのマーキング法による密度推定—. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 255-256. (+吉田成章, 岩崎 厚, 倉永善太郎, 牧野豊吉)
- 1978 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXVII) —支場実験林における産卵と誘殺経過の年次変動—. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 257-258. (+岩崎 厚, 今給黎靖夫)
- 1978 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXVIII) —後食予防剤の昆虫群集に及ぼす影響 (1) 草原での予備調査—. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 259-260. (+今給黎靖夫, 倉永善太郎, 岩崎 厚) [林業試験場九州支場年報, (20): 46]
- 1978 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXIX) —後食予防剤の昆虫群集に及ぼす影響 (2) 死亡昆虫の落下経過—. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 261-262. (+倉永善太郎, 岩崎 厚, 今給黎靖夫) [林業試験場九州支場年報, (20): 47]
- 1978 支場構内におけるマツノマダラカミキリの羽化, 産卵と誘殺経過の年次変動. 林業試験場九州支場年報, (20): 45
- 1979 まつくい虫その後. アニマ (平凡社), (65): 93.
- 1979 マツの枯損量とマツノマダラカミキリの密度. 森林防疫, 28(5): 2-5.
- 1979 まつくい虫の総合防除のシステム化に関する研究 (I). 日本林学会九州支部研究論文集, (32): 67-78. (+西沢正久, 竹下敬司, 長 正道)
- 1979 まつくい虫の総合防除のシステム化に関する研究 (II). —写真(フィルム)の種類によるまつくい虫被害木判読の予備テスト—. 日本林学会九州支部研究論文集, (32): 69-70. (+長 正道, 西沢正久, 竹下敬司)
- 1979 マツノマダラカミキリに関する研究 (XXX) —餌木による成虫の誘引数の検討—. 日本林学会九州支部研究論文集, (32): 273-274 (1979). (+岩崎 厚, 竹谷昭彦)
- 1980 松を枯らす罪なき罪 マツノマダラカミキリの生態. アニマ (平凡社), (89): 23-28.
- 1980 まつくい虫. 昆虫と自然, 15(12): 6-9.
- 1981 まつくい虫の総合防除のシステム化に関する研究. 科学研究費補助金研

- 究成果報告書 総合研究 (A) 436012, 149 pp. 九州大学農学部林学科,  
福岡. (+西沢正久, 他5名)
- 1982 マツノザイセンチュウの生態および被害と防除. 農葉グラフ, (82): 11-  
15.
- 2002 Perspectives of the pine wilt disease problems in Japan. Pp. 23-41. Proceedings  
of the International Symposium on Forest Resources Protection, 117 pp.  
Kangwon National University, Chuncheon.
- 2004 マツノマダラカミキリと松くい虫. 昆虫と自然, 39(11): 20-25.

#### IV タマバエ類の総合的防除法に関する研究

- 1972 タマバエ類の総合的防除法に関する研究. 林業試験場九州支場年報,  
(14): 90-91. (+倉永善太郎, 吉田成章)
- 1973 対馬におけるマツバノタマバエの被害と天敵寄生率の変動. 84 回日本  
林学会大会講演集: 343-344. (+倉永善太郎)
- 1973 スギタマバエとマツバノタマバエの生命表. 84 回日本林学会大会講演  
集: 344-345. (+吉田成章, 倉永善太郎)
- 1973 低密度林におけるマツバノタマバエ寄生蜂の重要性. 林業試験場九州支  
場年報, (17): 39. (+倉永善太郎, 吉田成章, 岩崎 厚)
- 1976 マツバノタマバエの生態に関する研究 (IV) —低密度林における寄生蜂  
の役割—. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 237-238. (+倉永善太  
郎, 吉田成章)
- 1976 山形県でのマツバノタマバエ天敵放飼試験. 林業試験場九州支場年報,  
(18): 37.
- 1976 スギタマバエによるスギ被害量の研究 (IV) —殺虫剤による産卵予防の  
影響—. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 231-232. (+吉田成章,  
倉永善太郎)
- 1977 マツバノタマバエの生態に関する研究 (V) —タマバエおよび規制法の  
発育零点—. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 259-260. (+倉永善  
太郎)
- 1977 マツバノタマバエの生態に関する研究 (VI) —樹内での幼虫密度と天敵  
寄生率の分布—. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 261-262. (+倉  
永善太郎, 吉田成章)
- 1977 スギタマバエによるスギ被害量の研究 (V) —材積調査例—. 日本林学

- 会九州支部研究論文集, (30): 265–266. (+吉田成章, 倉永善太郎, 岩崎厚)
- 1977 スギタマバエ産卵予防と施肥の効果. 林業試験場九州支場年報, (19): 35. (+吉田成章, 倉永善太郎, 岩崎厚)
- 1980 森林害虫による被害の増大をめぐる諸問題, マツバノタマバエ. 昆虫と自然, 15(12): 22–24.
- 1985 Loss of tree vigor and role of boring beetles in red pine stands heavily infested by the pine needle midge in Korea. *Esakia*, (23): 151–158. (with J. H. Ko)

## V 森林生態系の昆虫群集に関する研究

- 1975 昆虫群集の比較法に関する研究 I—複雑さに関する指数の適用—. 日本林学会九州支部研究論文集, (28): 189–190. (+倉永善太郎, 岩崎厚, 吉田成章)
- 1975 昆虫群集の比較法に関する研究 II—マレーズ・トラップによる林分間比較—. 日本林学会九州支部研究論文集, (28): 190–192. (+倉永善太郎, 岩崎厚, 吉田成章, 谷口明)
- 1976 二段式ライト・トラップの試作. 日本林学会九州支部研究論文集, (29): 239–240. (+倉永善太郎)
- 1976 昆虫相調査用トラップの試作. 林業試験場九州支場年報, (18): 38. (+倉永善太郎)
- 1977 昆虫群集の比較法に関する研究 (III) —マレーズ・トラップによる調査のサンプル数の検討—. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 263–264. (+今給黎靖夫, 倉永善太郎)
- 1979 九州地方人工林地域の土地利用と管理方式. 昆虫相調査. Pp. 218–221. 「農林漁業における環境保全的技術に関する総合研究」試験成績書, 第5集. 環境保全的土地利用技術と管理方式, 594 pp. 農林水産技術会議事務局, 東京.
- 2003 Resource use of insect seed predators during general flowering and seeding events in a Bornean dipterocarp rain forest. *Bulletin of Entomological Research*, 93(5): 455–466. (with M. Nakagawa, T. Itioka, K. Momose, & other eight authors)

## VI その他の森林害虫に関する研究

- 1969 マツノシンクイムシ寄生蜂の移植試験 (I). 日本林学会九州支部研究論文集, (23): 179-180. (+倉永善太郎)
- 1969 マツの枝曲り病. 日本林学会九州支部研究論文集, (23): 183-184. (+徳山陽山)
- 1977 ヒノキ造林地の新害虫 3 種. 日本林学会九州支部研究論文集, (30): 269-270. (+本車田勇)
- 1977 フィリピンの森林病虫害問題. 日本林学会九州支部研究論文集 (特別講演), (30): 1-2. [林試場報, (152): 6-7.]
- 1977 Forest and forest products pest problems in the Philippines. Technical Bulletin of the Tropical Agriculture Research Center, Tsukuba, 10. 27 pp. (with R.S. Raros)
- 1978 コガネムシ類の生態と防除に関する研究 (I) —主要種の齢構成変動と初期防除—. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 241-242. (+倉永善太郎, 川上 力)
- 1978 コガネムシ類の生態と防除に関する研究 (II) —*Beauveria* 菌による根切虫防除試験 1—. 日本林学会九州支部研究論文集, (31): 243-244. (+倉永善太郎, 宗 嘉信)
- 1978 コガネムシ類の生態と防除に関する研究. 林業試験場九州支場年報, (20): 49-50. (+倉永善太郎)
- 1978 ハラアカコブカミキリに関する知見. 菌蕈 (財団法人日本きのこセンター), 24(9): 20-23.
- 1979 コガネムシ類の生態と防除に関する研究 (II) —*Beauveria* 菌による根切虫防除試験 2—. 日本林学会九州支部研究論文集, (32): 285-286. (+倉永善太郎, 宗 嘉信, 甲斐一明)
- 1979 フィリピンの森林病虫害問題. 熱帯農研集報, (34): 18-23.
- 1980 森林害虫による被害の増大をめぐる諸問題. 昆虫と自然, 15(12): 2-5.
- 1982 V フィリピンにおける病虫害の生態と防除法 (熱帯地域における育林技術に関する研究—熱帯における更新技術の開発). 熱帯農研集報, (41): 184-213. (分担執筆; +山口博昭, 野淵 輝, 小林享夫, 真宮靖治)

## VII その他の昆虫に関する報告

- 1948 電燈に飛来せる昆虫. 土佐昆虫倶楽部速報, (1): 8.

- 1949 昆虫の化粧について. 土佐昆虫倶楽部速報, (4): 2.
- 1949 ミカドアゲハの交尾について. 土佐昆虫同好会会報, 1(1): 4. (+浜田俊彦)
- 1950 工石山産ゴミムシダマシ科 2 種に就いて. 土佐昆虫同好会会報, I(2): 3.
- 1950 アカツヤハムシの発音に就いて. 土佐昆虫同好会会報, 1(2): 3-4.
- 1950 コエンマに寄生ダニ. 土佐昆虫同好会会報, 1(2): 4.
- 1950 高知県産出尾蕈虫科に就いて. 土佐昆虫同好会会報, 1(2): 7.
- 1950 クロモンマグソコガネの上翅斑紋の変化. 土佐昆虫同好会会報, 1(2): 13.
- 1953 甲虫数種の生態. げんせい, 2(1/2): 44.
- 1954 ゴイシシジミ灯火に飛来す. 新昆虫, 7(13): 32.
- 1955 クロツバメシジミの絶滅した記録. 筑紫の昆虫, 1(2): 10-11.
- 1957 高知産ヒラタムシ 3 種の採集記録及びヒゲナガヒメヒラタの幼虫と蛹に就いて. げんせい, 5(2): 13-15.
- 1957 ヒゴトゲトゲの加害植物. げんせい, 6(1/2): 67.
- 1958 エノキを食べる蝶々の 3 月. 筑紫昆虫同好会月報, (34): 1-2.
- 1962 昆虫分類学入門 (1, 2). Insect Magazine (京浜昆虫同好会), (54): 39-42; (56): 33-36.
- 1963 虫屋誕生由来記. Wormship (北九州昆虫趣味の会), 71: 3-4.
- 1963 A contribution towards the knowledge of the genus *Scaphidium* Olivier of Japan. Sieboldia: acta biologica, 3(1): 55-99. (with T. Shirozu)
- 1965 南洋材輸入には産地の害虫相調査を. 横浜植物防疫ニュース, (275): 6.
- 1968 「太平洋地域昆虫の分布と系統」のセミナーに参加して. 場報 (農林省林業試験場調査部調査広報課), (44): 7.
- 1968 ロンドン通信 (1). 甲虫ニュース, (3): 2.
- 1970 イギリス留学記. 場報 (農林省林業試験場調査部調査広報課), (68): 5-6.
- 1973 九州の昆虫. 芸林, (5): 21-24.
- 1974 鞘翅類. 週刊世界動物百科 (朝日=ラルース), 増刊日本の動物 111: 19-24.
- 1974 鞘翅目の分類と系統. 週刊世界動物百科 (朝日=ラルース), 173: V-VII.
- 1974 コガネムシ類の分類と生態. 週刊世界動物百科 (朝日=ラルース), 175: V-VII.
- 1977 立田山の昆虫類. Pp. 159-200. 三十年のあゆみ. 242 pp. + 4 pls. 農林省

- 林業試験場九州支場, 熊本. (+倉永善太郎, 岩崎 厚, 吉田成章)
- 1978 ゾウムシの研究をはじめた頃. インセクトarium, 15(2): 2.
- 1982 家屋の中で発見されるキスイムシの 1 種について. 家屋害虫, (11/12): 60-61.
- 1984 1983 年甲虫界の動向. 昆虫と自然, 19(3): 13-18.
- 1985 マレーズトラップ. 昆虫と自然, 20(7): 16-49.
- 1986 きのを栽培するアリーハキリアリ. 菌蕈 (財団法人日本きのこセンター), 32(6): 44-46.
- 1986 記録と情報. 北昆の四季 (北九州昆虫趣味の会), (5): 1.
- 1986 虫との出会い. 昆虫と自然, 21(13): 33.
- 1987 1986 年の甲虫界. 昆虫と自然, 22(3): 13-18.
- 1987 タイワンシロアリときのこと. 菌蕈 (財団法人日本きのこセンター), 33(10): 40-42.
- 1989 A synopsis of the bruchid fauna of Japan. Pp. 131-140. In K. Fujii, A.M. Gatehouse, C.D. Johnson, R. Mitchel, & T. Yoshida (eds.), *Bruchids and legumes: economics, ecology and coevolution*. i-ix + 407 pp. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- 1990 *Bruchidius sericollis*, a new species of Bruchidae from Japan. *Esakia*, Special Issue, (1): 93-95.
- 1990 昆虫分類学と日本産昆虫総目録の編纂. 九州大学研究紹介, (4): 940.
- 1990 1989 年の甲虫界. 昆虫と自然, 25(3): 2-7.
- 1991 日本の昆虫相. 遺伝 (裳華房), 45(1): 15-21.
- 1991 Description of the egg and first-instar larva of *Clytra arida* Weise (Coleoptera, Chrysomelidae). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 35(3/4): 93-99. (with J.Y. Lee)
- 1991 The egg and first-instar larva of *Oomorhoides cupreatus* (Baly) from Japan, with notes on the systematic position of *Lampo somatinae* (Coleoptera, Chrysomelidae). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 35(3/4): 101-107. (with J.Y. Lee)
- 1992 1991 年の甲虫界. 昆虫と自然, 27(3): 6-10.
- 1992 日本から記載された謎のクワガタムシ. 昆虫と自然, 27(4): 24-27.
- 1992 甲虫の前翅と後翅. 昆虫と自然, 27(9): 2-8.
- 1992 はねる甲虫—コメツキムシ. 昆虫と自然, 27(12): 15-18.

- 1992 日本のタマムシモドキ科に関する記録. 甲虫ニュース, (100): 24–25.
- 1992 多様化した昆虫の世界. 週刊朝日百科 動物たちの地球, (73): 30–31.
- 1992 甲虫の系統と進化. 昆虫と自然, 27(14): 37–42.
- 1992 機械仕掛けのような構造のコウチュウ目, 生物界最大の分類群. 週刊朝日百科 動物たちの地球, 第3巻昆虫 (79): 194–195.
- 1992 多様な食性を反映する口器, コガネムシ. 週刊朝日百科 動物たちの地球, 第3巻昆虫 (79): 206–207.
- 1993 長い口吻は産卵の道具. 週刊朝日百科 動物たちの地球, 第3巻昆虫(80): 242–243.
- 1993 用語解説. 週刊朝日百科 動物たちの地球, 第3巻昆虫 (80): 256.
- 1993 1992年の甲虫界. 昆虫と自然, 28(3): 7–11.
- 1993 ナガヒラタムシ. インセクタリウム, 30(6): 209.
- 1993 海辺の甲虫概説. 昆虫と自然, 28(11): 2–6.
- 1993 昆虫情報と図書館. 図書館報 (九州大学附属図書館), 29(3): 19–20.
- 1993 馬場さんとの思い出話2題. 甲虫ニュース, (102): 4.
- 1994 1993年の甲虫界. 昆虫と自然, 29(3): 11–17.
- 1995 1994年の甲虫界. 昆虫と自然, 30(3): 844.
- 1995 ハラビロカタカイガラムシの一次寄生蜂 *Microterys flaws* に関する生態学的研究. 九州大学農学部学藝雑誌, 50(1/2): 37–43. (+金鐘國)  
[Biological studies on *Microterys flavus* (Howard) (Hymenoptera: Encyrtidae), a primary parasitoid of *Protopulvinaria mangiferae* (Green) (Homoptera: Coccidae). (with J.-k. Kim)]
- 1995 ハラアカクロテントウムシ *Rhizobius forestieri* (Mulsant)の生態に関する研究. 九州大学農学部学藝雑誌, 50(1/2): 45–50. (+金鐘國)  
[Biological studies on the *Rhizobius forestieri* (Mulsant) (Coleoptera: Coccinellidae). (with J.-k. Kim)]
- 1996 甲虫分類学の動向. 昆虫と自然, 31(4): 5–12.
- 1996 Discovery of the family Boreidae (Mecoptera) from Japan, with description of a new species. Japanese Journal of Entomology, 64(1): 75–81. (with S. Hori)
- 1996 昆虫類 (六脚上綱) 総論. Pp. 46–49. 日本動物大百科 8 昆虫 I (日高敏隆 監修; 石井 実, 大谷 剛, 常喜 豊 編). 188 pp. 平凡社, 東京.
- 1997 甲虫分類学の動向. 昆虫と自然, 32(4): 2–9.
- 1997 昆虫の種多様性と分類学. 哺乳類科学, 37(1): 27–32.



- 1997 昆虫分類学と同好者の貢献. 福井虫報, (21):1-2.
- 1998 昭和の昆虫記(2), 高知県立城東中学校生物部の頃. 昆虫と自然, 33(9): 45.
- 1999 Descriptions of three new species of the genus *Scaphidium* (Coleoptera, Staphylinidae, Scaphidiinae) from the Ryukyus, Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, 5(1): 87-95. (with H. Hoshina).
- 1999 Redescription of *Agathidium* (*Neoceble*) *curtipenne* (Coleoptera: Leiodidae). Esakia, (39): 109-111. (with H. Hoshina & N. Narukawa).
- 1999 日本産デオキノコムシ科3種についての覚書. 甲虫ニュース, (125): 7-8. (+保科英人)
- 2000 林冠コウチュウの種多様性. 昆虫と自然, 35(5): 16-20.
- 2000 阿部琢哉博士を憶う. しろあり, 東京, (121): 46.
- 2001 Establishment of *Acanthoscelides pallidipennis* (Coleoptera: Bruchidae) feeding in seeds of the introduced legume *Amorpha frulicosa*, with a new record of its *Eupelmus* parasitoid in Japan. Applied Entomology and Zoology, 36(3): 269-276. (with M. Tsuda, K. Shima, & C.D. Johnson).
- 2001 南鳥島の昆虫採集記. 北九州の昆蟲, 48(2): 71-75.
- 2001 「福岡県の希少生物」掲載の甲虫等昆虫の採集記録と出典. 北九州の昆蟲, 48(2): 77-94.
- 2001 生き物と住まい再考. 90 pp. (虫も住む家一家の昆虫学: 39-49 執筆). コミュニケーション・レポート No. 126. 財団法人住宅産業研修財団
- 2002 福岡県の絶滅昆虫—甲虫類など. 昆虫と自然, 37(7): 24-26.
- 2003 甲虫相の解明におけるプロとアマチュアの共同. 昆虫と自然, 38(9): 18-19.
- 2003 カミキリムシはどのように進化したか. 昆虫と自然, 38(11):4-10.
- 2003 新刊紹介. 梅谷・岡田編「日本農業害虫大事典」. 昆蟲(ニューシリーズ), 6(4): 177.
- 2004 甲虫分類学の方法と分類体系. 昆虫と自然, 39(3): 4-9.
- 2004 白水隆先生を偲ぶ. 月刊むし, (401): 7-8.
- 2004 白水隆先生の逝去を悼む. 昆虫と自然, 39(9): 8-9.
- 2004 総論: 害虫としてのカミキリムシ類. 昆虫と自然, 39(11): 4-5.
- 2004 海外ブックレビュー(4). ニューージーランドの昆虫関連書籍. 昆虫と自然, 39(12): 25-26.

- 2005 昆虫学の大著を見る (1). ユンクのカタログ. 昆虫と自然, 40(1): 34–36.
- 2005 中條道夫先生を憶う. 甲虫ニュース, (149): 5.
- 2006 佐々治寛之博士の逝去を悼む. 昆虫と自然, 41(11): 30–31.
- 2008 日本産昆虫分類同定の種本 (1) シロアリ目とシロアリモドキ目. 昆虫と自然, 43(9): 25–26.
- 2008 Lansania Journal of arachnology and zoology — a rare and obscure Japanese natural history journal. Archives of natural history, 35(2): 252–280. (with W. J. Tennent & M. Yasuda)
- 2009 市橋 甫君を偲ぶ. ひらくら, 53(1): 37–38.
- 2009 A novel host shift and invaded range of a seed predator, *Acanthoscelides macrophtalmus* (Coleoptera: Chrysomelidae: Bruchinae), of an invasive weed, *Leucaena leucocephala*. Entomological Science, 12(1): 1–8. (with M. Tuda, L.-H. Wu, Y. Tateishi, and other 10 authors)
- 2009 A new species of *Stenoria* (Coleoptera, Meloidae) from Japan, with description of the first instar larva. Japanese Journal of Systematic Entomology, 15(2): 475–480. (with Y. Maeta).
- 2010 日本産昆虫分類同定の種本 (2) ゴキブリ目. 昆虫と自然, 45(2): 23–24.
- 2010 日本産昆虫分類同定の種本 (3) シリアゲムシ目. 昆虫と自然, 45(6): 26–28.
- 2011 翅を失った昆虫. シリアゲムシ目. 昆虫と自然, 46(1): 10–13.
- 2012 甲虫類の採集法概説. 昆虫と自然, 47(5): 2–5.
- 2012 昆虫分類学入門 (1). 昆虫と自然, 47(9): 23–26.
- 2013 コウチュウ目 1 : 表面構造. 連載 : 昆虫分類学入門 (2). 昆虫と自然, 48(1): 24–26.
- 2013 コウチュウ目 2 : 腹部と外部生殖器. 連載 : 昆虫分類学入門 (3). 昆虫と自然, 48 (3): 24–29.
- 2013 コウチュウ目 3 : 分類体系. 連載 : 昆虫分類学入門 (4). 昆虫と自然, 48 (10): 23–27.
- 2014 コウチュウ目 4 : 検索表. 連載 : 昆虫分類学入門 (5). 昆虫と自然, 49 (1): 28–31.

## VIII 著書

- 1959 彦山昆虫目録 II. 鞘翅目 (安松京三 編), 93 pp. + 4 pls. 九州大学附属彦山生物学研究所, 彦山. [K. Yasumatsu (ed.) *Enumeratio Insectorum Montis Hikosan II. Coleoptera*. 93 pp. + 4 pls. *Hikosan Laboratorium Biologicum Universitatis Kyushuensis, Hikosan*.] (分担執筆: デオキノコムシ科, コメツキダマシ科, ハムシダマシ科, アカハネムシ科, クビナガムシ科, ミツギリゾウムシ科, オトシブミ科, ホソクチゾウ科, ゾウムシ科. Pp. 71–87 + 1 pl.)
- 1964 シロアリ防除ダイジェスト. 140 pp. 全日本しろあり対策協会. (分担執筆, pp. 9–37)
- 1964 昆虫 II (岡田 要, 湯川秀樹, 黒沢良彦 監修). 科学図鑑, 1(14). 116 pp. 世界文化社, 東京. (+黒沢良彦, 遠田暢男, 須田孫七).
- 1966 日本百科大事典別冊 原色昆虫図鑑 (黒沢良彦, 日高敏隆 編), 475 pp. (incl. 160 pls.) 小学館, 東京. (分担執筆)
- 1968 シロアリ防除ダイジェスト (改定版). 163 pp. 日本しろあり対策協会, 東京. (分担執筆, pp. 9–49)
- 1971 動物系統分類学 (内田 亨 監修), 7 (下 B) 節足動物 (IIIb) 昆虫類 (中). 340 pp. 中山書店, 東京. (分担執筆: シロアリ類, pp. 111–128; シロアリモドキ類, pp. 128–132.)
- 1973 現代生物学体系 2 無脊椎動物 B (安松京三 監修, 朝比奈正二郎 編), iii–xii + 435 pp. 中山書店, 東京. (分担執筆: H. 鞘翅目 (Coleoptera), pp. 325–345.)
- 1973 日本淡水生物学 (川村多實二 原著; 上野益三 編修), iii–xiii + 760 pp. 北隆館, 東京. (分担執筆: 鞘翅目 Coleoptera, pp. 610–635. + 上野俊一, 佐藤正孝)
- 1973 シロアリ防除ダイジェスト (再改定版). 220 pp. 日本しろあり対策協会, 東京. (分担執筆, pp. 10–57)
- 1974 万有百科大事典 20 動物, i–iv + 683 pp. 小学館, 東京. (分担執筆: 昆虫類)
- 1977 立田山の昆虫類. Pp. 159–200. 三十年のあゆみ. 242 pp. + 4 pls. 農林省林業試験場九州支場, 熊本. (+倉永善太郎, 岩崎 厚, 吉田成章)
- 1977 マツ属の材線虫病とその防除. わかりやすい林業研究解説シリーズ, 58, 65 pp. 日本林業技術協会, 東京 (+真宮靖治)
- 1978 森林防疫制度史—森林病虫獣害防除 28 年の歩み—. 277 pp. 全国森林病

- 虫獣害防除協会. (分担執筆: 第8章 主要病虫獣害防除の研究 4. マツバノタマバエ, 5. スギタマバエ, pp. 161-171.)
- 1979 森林の害虫. 69 pp. ニューサイエンス社, 東京.
- 1980 応用昆虫学総説. (野村健一 編). i-viii + 302 pp. + 2 pls. 養賢堂, 東京.  
(分担執筆, 第8章 森林害虫に関する最近の課題, pp. 195-218.)
- 1980 しろあり詳説, i-vii + 314 pp. 社団法人日本しろあり対策協会, 東京.  
(分担執筆: 第1章 シロアリ, pp. 1-111.)
- 1984 原色日本甲虫図鑑 (IV). IV-VII + 438 pp. (incl. 72 pls.). 保育社, 大阪 (+ 林 匡夫, 木元新作 共同編著)
- 1985 原色日本甲虫図鑑 (II) (上野俊一, 黒澤良彦, 佐藤正孝 共同編著). iii-viii + 514 pp. (incl. 80 pls.). 保育社, 大阪. (分担執筆: デオキノコムシ科 Scaphidiidae, pp. 252-260.)
- 1986 原色日本甲虫図鑑 (I). iii-vi + 323 pp. (incl. 113 pls.). 保育社, 大阪. (+ 林 長閑 共同編著)
- 1986 日本の昆虫—侵略と攪乱の生態学 (桐谷圭治 編). 179 + 16 pp. 東海大学出版会, 東京. (分担執筆: ゾウムシ類—世界各地への侵入者, pp. 132-139.)
- 1988 日本の甲虫—その起源と種分化をめぐって (佐藤正孝 編). 209 pp. 東海大学出版会, 東京. (分担執筆: ゾウムシ相の特徴と起源, pp. 190-198.)
- 1989 昆虫分類学. i-vii + 597 pp. 川島書店, 東京. (+ 平嶋義宏, 多田内修)
- 1989 日本産昆虫総目録 I, II, 索引 (平嶋義宏監修, 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター 共同編集). 1767 pp. 九州大学農学部昆虫学教室, 福岡. (編集及び分担執筆)
- 1990 日本産昆虫総目録 追加・訂正 (平嶋義宏監修, 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター 共同編集). 37 pp. 九州大学農学部昆虫学教室, 福岡. (+ 多田内修, 斉藤秀生)
- 1991 昆虫採集学 (平嶋義宏・馬場金太郎 編). 666 pp. 九州大学出版会, 福岡. (分担執筆: 5-9 定量的採集法, pp. 409-414.)
- 1991 日本産土壌動物検索図説 (青木淳一 編). iii-viii + 405 figs. + 201 pp. 東海大学出版会, 東京. (分担執筆: シロアリ目 (等翅目) Isoptera, fig. 282-285 & pp. 92-94.)
- 1992 木材保存学入門. 330 pp. 日本木材保存協会 (執筆: 湿潤材の虫害の項)
- 1993 しろあり及び腐朽防除施工の基礎知識 1993 年版. 165 pp. 日本しろあ

- り対策協会，東京．（執筆：シロアリの生態と被害の項）
- 1993 原色ペストコントロール図説．第IV集 52項．日本ペストコントロール協会（執筆：マメゾウ，コクゾウ，ササコクゾウの項）
- 1994 森林昆虫 総説・各論（小林富士雄・竹谷昭彦編），9 + 567 pp. 養賢堂，東京．（分担執筆）
- 1995 日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状―（無脊椎動物編II）（環境庁自然保護局野生生物課 編）．620 pp. 財団法人自然環境研究センター，東京．（分担執筆：日本産野生生物目録（33）節足動物門・昆虫綱 コウチュウ目．Pp. 167-336. +上野俊一，大原昌宏，大林延夫，他17名）
- 1996 日本原色虫えい図鑑（湯川淳一・榊田 長 編著）．826 pp. 全国農村教育協会，東京．（分担執筆：II. 一般解説 鞘翅目，pp. 370-373；V. 虫えいを形成する害虫 マツバノタマバエ，スギタマバエ，pp. 467-471.）
- 1996 日本動物大百科8 昆虫I（日高敏隆 監修；石井 実，大谷 剛，常喜 豊 編）．188 pp. 平凡社，東京．（分担執筆：昆虫類（六脚上綱）総論，pp. 46-49.）
- 1997 木材科学講座 12 保存・耐久性（屋我嗣良，河内進策，今村祐嗣 編），224 pp. 海青社，大津．（分担執筆：第1章第2節 森林と昆虫，pp. 15-18.）
- 1997 動物学がわかる．「学問がわかる。」シリーズ 18，AERA Mook (Asahi Shimbun Extra Report & Analysis Special), (22). 191 pp. 朝日新聞社，東京．（分担執筆，動物学25のかたち 昆虫学，pp. 40-41.）
- 1998 日本動物大百科10 昆虫III（日高敏隆 監修；石井 実，大谷 剛，常喜 豊 編）．187 pp. 平凡社，東京．（分担執筆：甲虫類，pp. 88-89；ゾウムシ上科，pp. 151-154.）
- 1999 熱帯昆虫学（矢野宏二・矢田 脩 編）．ii-xiv + 405 pp. 九州大学出版会，福岡．（分担執筆：シロアリ目（等翅目），pp. 207-216；コウチュウ目（甲虫目），pp. 317-323.）
- 1999 日本産土壌動物一分類のための図解検索（青木淳一 編）．v-xxxix + 1076 pp. 東海大学出版会，東京．（分担執筆：昆虫綱 シロアリ目（等翅目） Isoptera，824-831.）
- 2000 シロアリと防除対策（社団法人日本しろあり対策協会 編），xii + 389 pp. 東京．（分担執筆：第1章 シロアリ，pp. 1-126.）

- 2000 昆虫類の多様性保護のための重要地域 第2集 (石井 実, 藤山静雄, 星川和夫 編). i-iv+100 pp. 日本昆虫学会自然保護委員会 (分担執筆: 環境アセスメントと昆虫, pp. 1-8)
- 2001 福岡県の希少野生生物—福岡県のレッドデータブック 2001—, 447 pp. 福岡県 (分担執筆: 昆虫類: 甲虫類ほか, pp. 344-345; キイロネクイハムシなどの各種執筆, pp. 346-395.)
- 2003 昆虫学大事典 (三橋 淳 総編集), ii-xiv+1200 pp. 朝倉書店, 東京. (分担執筆: 2. 昆虫の分類・同定, pp. 19-62; 3. 主要分類群の特徴, pp. 63, 82, 83-116; 4. 昆虫の形態, pp. 131-169.)
- 2006 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— (環境省自然環境局野生生物課 編) 5 昆虫類, 246 pp. 財団法人自然環境研究センター, 東京. (昆虫類責任者; 分担執筆: 昆虫類概説, pp. 22-23 など)
- 2006 Curculionidea: general introduction and Curculionidae: Entiminae (Part 1). Phyllobiini, Polydrusini and Cyphicerini (Coleoptera). The Insects of Japan, 3. 406 pp. (incl. 898 figs.). Touka Shobo, Fukuoka. (with H. Kojima & S. Miyakawa)  
(ゾウムシ上科概説・ゾウムシ科 (1). 日本の昆虫, 3.)
- 2007 新訂原色昆虫大図鑑 II (甲虫篇). 32+526 pp.+196 pls. 北隆館, 東京.  
(新訂監修)
- 2008 新訂原色昆虫大図鑑 III (トンボ目・カワゲラ目・バッタ目・カメムシ目・ハエ目・ハチ目 他). 14+654 pp.+176 pls. 北隆館, 東京. (+平嶋義宏 新訂共同監修; 分担執筆: シロアリ目 Isoptera, pl. 41 & pp. 98-107.)
- 2015 Curculionidae: Entiminae (Part 2) (Coleoptera). The Insects of Japan, 4. 758 pp. (incl. 373 figs.). Touka Shobo, Fukuoka. (with T. Nakamura & K. Kannô)  
(ゾウムシ科 クチブトゾウムシ亜科 (2). 日本の昆虫, 4.)

(作成: 辻 尚道・今田舜介, 協力: 城戸克弥)

## ケイちゃんとの出会い

(80) 村上陽三

1952年4月、入学式が行われる医学部中央講堂の前には、市内や県内の高校を卒業したと思われる新入生がグループを作って式の始まりを待っていた。北陸の一地方都市からやって来た私には誰一人知り合いはなく、早めに講堂へ入り後方の壁にもたれて立っていた。もう一人同じようにして式の開始を待つ男がいた。襟には農学部を示すAのバッジを着けていた。私は彼に近付き声を掛けた。驚いたことに、彼も私と同じ志を懷いて九大にやってきたのだ。これが森本桂君との最初の出会いである。

高知県出身の彼は、引込思案な北陸人の私とは違って、極めて積極的であった。式が終わるとすぐ、今から昆虫学教室へ行かないかと私を誘った。まさか入学式の日昆虫学教室を訪ねようとは夢にも思っていなかった。私たちは江崎先生に会い、将来昆虫学を専攻したい旨を告げた。

翌日教養部でのオリエンテーションの後、当時第一分校で生物学を担当していた白水先生に二人で挨拶に行った。これも森本君の提案によるものだった。先生は私たち二人のために、自室に机を用意して下さった。

二年後私たちは、農学部に進学するとすぐ昆虫学教室に入れていただき、通称大部屋で机を並べることになった。初めのうちはお互いに「森本君」「村上君」と呼び合っていたが、そのうち「ケイちゃん」「ヨウちゃん」に変わった。

私はハチとアリ以外の昆虫については殆ど無知であったが、ケイちゃんは昆虫全般についてかなり詳しい知識を持っており、彼から多くの刺激を受けた。採集も実にうまかった。私たちは自分の関心のある昆虫だけでなく何でも採集し互いに採集品を交換した。彼が採集した珍品の中でも特に印象に残っているのはヒコサナムカシアリで、体長は僅か1ミリの微小なアリである。彼はこれを彦山生物学実験所の構内で採集し、安松先生が新種として命名記載した。ムカシアリ亜科では日本で最初に発見されたアリである。

博士課程修了後の1961年4月、ケイちゃんは当時東京都目黒区にあった農林省林業試験場に就職した。その7ヶ月後、私は神奈川県平塚区にあった農林省園芸試験場に就職した。そのため東京や横浜では彼と再び会う機会が増えた。

園芸試験場で私は、ナシやリンゴの果実を加害するクワコナカイガラムシの生物的防除の研究に従事したが、業務命令でその他の果樹害虫の研究を任されたこともある。当時全国各地のクリの新植園でキクイムシが大発生しその原因

と対策を明らかにするための研究に従事することになった。キクイムシについて全く無知だった私は、ケイちゃんの紹介で林業試験場のキクイムシの専門家からいろいろと教わる事ができた。

1967年、私は九大農学部到新設された生物的防除研究施設に移った。ケイちゃんは林業試験場と同九州支場に17年近く勤務された後、1978年九大農学部昆虫学教室に移って来られ、1997年の定年退職まで同じ職場の同僚として過ごした。そして最終講義も退官記念パーティーも合同で行う事ができた。

私は停年退職後数年間、福岡県立大学や九州東海大学の非常勤講師を務めたが、研究からは遠ざかった。しかしケイちゃんは、最期まで研究活動を続けられた。本当に尊敬する生涯の友を持つことができ、心から感謝している。



写真 九州大学理学部食堂附近にて 森本桂君と  
1954年11月21日 川島健治郎氏撮影



## 森本桂さん有難うございました

(86) 三枝豊平

2019年8月26日に開かれた九州大学教養部生物学教室の元職員達の親睦会で、九大総合研究博物館で仕事をしていた矢田脩さんに、森本さんが博物館に見えたらお会いしたいから、連絡してくれるように依頼した。しかし、それから1週間余り過ぎて、森本さんが急逝されたとの突然の訃報に接して、言葉を失った。森本さんが脳卒中になられてから、お見舞いに行かなければと思いつながら、失礼していた。なぜ早く森本さんにお会いしなかったのか、と慚愧の念に打ちひしがれるばかりであった。

森本さんとは数限りない思い出があったのだが、私も歳とともに今、その記憶の多くが薄れゆくのが残念である。私が最初に森本さんを知ったのは、九州大学に入学して間もなく日本昆虫学会九州支部大会の折に、サルゾウムシ属の講演をされていた時であった。翌年、1956年秋に私は九州大学農学部に進学して森本さんと同じ昆虫学教室の学生部屋に研究机を置かせていただき、それ以降、彼が1962年に東京の林業試験場に就職されるまでの5年余り、森本さんから実に多くのことを学ばせていただいた。

1957年私が大学3年の夏休みに、森本さんから青森県下北半島、今のむつ市の菓研温泉の奥の大畑の湯の股に、当時の青森営林署の森林資料館があり、その地の昆虫標本コレクション作成のアルバイトを紹介していただいた。森本さんはその前年にその仕事をされていた。営林署の保養所に一か月ほど滞在して北国の自然に接する貴重な体験をさせていただいた。谷川に沿った露天風呂に入り、闇夜の流れの上をホテルが一つ二つ点滅しながら飛んでいたのも印象的であった。その時に採集したオドリバエ *Empis (Planempis)* の1未記載種の標本1ペアが、まだ記載せずに標本箱の中で60有余年眠り続けている。私が初めて採集したオドリバエであるし、また、数少ない森本さんゆかりの標本なので、早めに献名できればと思っている。気づいてみれば、森本さんに献名したのは彼が韓国で採集してくれたアシナガバエ科のナガレアシナガバエの1種、*Diostracus morimotoi* Saigusa だけである。

大学3年の時に、箱崎キャンパス西門近くの第二学生寮に住んでいた私は、森本さんの紹介で彼が間借りしていた大学正門前の松井荘の空部屋に移り住むようになった。それ以来、昆虫学教室大部屋での研究生活はもちろん、下宿でも森本さんと生活を共にしていた。いつもは夜10時に大学は消灯になるの

で、森本さんと下宿に戻り、そのまま連れだって近くの銭湯、新楽湯に行き、帰りに近くの雑貨店でクラッカーなどを森本さんが買って、下宿に戻り、それから私が森本さんの部屋に出かけてクラッカーを食べたりお茶を飲んだりして、昆虫の研究はもちろん人生様々な話を夜更けまで続け、眠くなったら自分の部屋に戻る、という毎日であった。何を話していたか一つ一つは思い出せないが、私の昆虫学全般の知識の多くはその折に森本さんから受けたものであることは間違いない。本当に貴重な時間を共有させていただいた。

私は農学部ではミノガ科の研究をしていた。ミノガについては森本さんとの関わりでいくつもの思い出がある。その一つがクロチビミノガ *Taleporia nigropterella* Saigusa である。森本さんは人も知る昆虫採集の超名人で、ベルレーゼ・ファネルを使って腐葉層の中の昆虫の採集もされていた。ある時、ファネルから落下した昆虫の中に 1 cm 足らずの薄茶色をした三角柱状の筒に入っている幼虫を見つけて、多分ミノムシだろうと言われて、私に渡していただいた。当時腐葉層の中にミノムシがいることなど私は考えもしなかったが、幼虫の前胸の形態を調べると将にミノガ科に該当した。その後、この種の幼虫の飼育に成功して、羽化させたのが上記のミノガで、雄は全体が黒色、雌は翅が退化しているが触角も脚もかろうじて機能的な種であり、修士論文で新種として記載した。

学部では当時普通種であったオオミノガをテーマにした。雌が翅も付属肢もすべて欠く一見蛆虫状の成虫に退化することから、この科の系統進化にも興味をもつようになった。この研究に関しては、森本さんから徳田御稔先生の名著「改稿進化論」を紹介していただき、進化の研究には大変役に立つからよく勉強するようと言われた。本書は生物の体の構造と生活の密接な関連性の中で進化を考察する研究方向を強く示していて、ミノガ科の系統進化の考察には極めて示唆に富む書であり、私の系統進化の基本的概念は本書から強く影響を受けた。それとともに、風呂上りから森本さんの部屋にお邪魔する時間の中で、ミノガの進化に関しても森本さんと多くの論議を重ねて、雌の形態退化と行動の進化に関する考察の方向性をつかむことができた。「ミノガ科進化の過程における習性と形態についての概観」(蝶と蛾, 12, 1962) という論文は修士課程 2 年の折に、森本さんとの議論を通じて書き上げた。この論文では今でいう派生形質共有 *synapomorphy* の概念を含んだ系統進化の解析方法も示した。私の研究歴の中でみずから誇れる唯一の論文であると今でも思っている。もちろん、この論文のなかでは、「森本桂氏との討論により考えを発展させることができ

た点多くある」と謝辞を述べさせていただいた。

森本さんにはミノガに限らず多くの教えを受けていて、私からは何一つ恩返しもできなかったが、私がひそかに自負している森本さんへの私のささやかな働きがあった。教養部学生の際に白水隆先生と山本英穂さんのミドリシジミ族の系統進化の研究状況を見ていた私は、学部に進学後諸先輩の研究が専ら記載分類学なのに「疑義」を抱き、記載分類とともに比較形態学による系統進化学の研究方向を目指すべきである、と思った。生意気にも森本さんに大部屋でも夜のひとときでも、しつこくこのような議論を吹きかけた。森本さんはうさいことを言う奴だと思いつつながら、議論に応じてくださった。学部でサルゾウムシ類の、また修士課程ではシギゾウムシ類の記載分類をされていた森本さんに、ゾウムシ類の比較形態学、系統進化学的研究を始めるべきだと意見をのべていた。そのご、森本さんは、お前の言うことなど先刻分かっているよと言わんばかりに、博士課程でゾウムシ上科の比較形態学をテーマにして徹底的にこの仲間の形態学的研究に没頭され、3年間でゾウムシ上科の比較形態学と系統学を打ち立てる金字塔的な学位論文を完成された。

研究面以外でも森本さんには大変お世話になった。貧乏学生であった私は、夜はもっぱら森本さんが風呂の帰りに買ってくるお菓子や飲み物、下宿の一階の炊事用の土間にあった井戸から汲んできた水を沸かしたお茶をいただく日常であった。湯沸しの電気ポットの底にナメクジが煮つまっているのに気づいたのもそのころの思い出である。また、時折大学近くの「窓」というトリスバーに連れて行っていただいた。山本英穂さんや神谷寛之(旧姓佐々治)さんもご一緒のことがあり、トリスウィスキーやジンをちびちびやりながら虫をはじめいろいろと歓談をしたのも、森本さんとの懐かしい一コマである。3人共に故人となったが、今でも彼らの面影や話しぶりを鮮やかに思い出すことができる。

思い返してみても森本さんと採集を共にしたことはなぜかほとんどなかった。九大昆虫学教室と韓国慶北大学の李昌彦さんとの共同研究で韓国の昆虫相調査の研究が行われ、私もそれに参加させていただいたことくらいであろうか。知る人ぞ知るで、森本さんは昆虫採集の名人、右手に四つ折りの頑丈な捕虫網、左手に叩き網をもって、手あたり次第に、猛烈に樹木の枝をたたき、下草をネットで荒っぽくスイーピングする。落ちた虫やネットに入った虫は大概吸管で吸い採っていた。森本さんが採集で歩いた後は木の枝は折れ、草はなぎ倒され、虫はもうそこにはいなかった。捕虫網の四つ折り金属枠をいくつも壊すほ

どであった。それでいて前述のベルレーゼ・ファンネルのような特殊な採集もされるし、また灯火採集もされていた。このような採集を通じての昆虫のあらゆる分類群について卓越した造詣の持ち主であった。何時だったか鹿児島大学におられた山根正気さんが、森本さんの昆虫全般についての知識に接して大変感服していると言われていたことがあった。

森本さんは状況を聡明、冷静に判断して慎重・適確に行動される人柄だった。血の気の多い私は、森本さんから、「三枝君、まあ、お前、そういうけど」とたしなめられることが多かったが、また優しく思いやりのある励ましをしていたのも数限りなくあった。生意気盛りの私が先生や先輩から説教されて項垂れていると、「出る釘は打たれるという譬えがある。頑張ってみるさ」と温かく見守り、励ましていただいた。大阪府大でミノガ科を研究されていた矢野宏二さんが九大の大学院に入ることになった折も、森本さんに相談したら、はっきり自分はミノガ科の研究を続けたい、と伝えなさい、との示唆をいただいたこともあった。私の人生の一番の転機は修士課程を終わる頃、白水先生から九州大学教養部生物学教室に新しく配置された教務員の職を勧められた。まだ就職されていない多くの先輩の院生もいるし、白水先生と蝶類の共同研究をされていた山本英穂さんも中学の教諭をされていた頃である。白水先生からのお勧めとは言え、これを簡単にお受けしてよいか随分迷ったが、思い切って森本さんに相談してみた。もちろん森本さんも博士課程を終わった頃であった。森本さんは、「それは結構な話じゃないか、ぜひ受けなよ。先輩のことは気にすることはまったくないよ」と強く励まして私の進路を定めてくださった。森本さんのこの勧めがなければ、今の私やその後私との関係で昆虫学を学んだ多くの学生、院生の姿は、おそらく全く別のものになっていたことであろう。

森本さんはその後林業試験場で森林昆虫学の研究も始めて、マツノザイセンチュウの研究で大きな成果をあげ、シロアリの研究も手がけて、応用昆虫学者としての道も進んでこられたことは衆知のとおりである。これらの研究経歴が平嶋義宏教授に評価されて九州大学昆虫学教室の助教授に赴任された。その頃の昆虫学教室は院生が研究の進展に当惑している様子が見られた。教養部生物学教室には私のほかに中西明徳、寫 洪、矢田脩の3人の昆虫分類学者が在籍していて、昆虫系統論のゼミも開いていた。このゼミに昆虫学教室の院生の多く、山本優、多田内修、江本純、林正美、上田恭一郎、大原賢二、瀬戸屋耕二、江田信豊の諸君等も参加して、Hennig 流の系統学研究や Brundin などの動物地理学の論文などをテーマに稔り多い議論を何年か続けていた。しかし、私は森

本さんが昆虫学教室に赴任されることが決まったので、院生を含めたゼミを続ける必要はもうないと判断して、皆さんにゼミを終わりにすることを提案して、森本さんによる院生の指導に差障りが生じないようにした。

森本さんは人も知る博覧強記の研究者で、鞘翅目に限らず昆虫全般についての広範な知識の持ち主であったことは前述のとおりであるが、それとともにたゆまない努力家であったことも身近で強く感じていた。今にして、残念至極なことは、九大昆虫学教室に限らず日本の昆虫分類学や分類学者について多くの出来事を見聞されていたので、昆虫学史のようなものを森本さんには是非ともお書きいただきたいかった。一度それをお願いしたが、森本さんは今はゾウムシの研究が手一杯であるとのことで、極めて残念だったが対応していただけなかった。以前に同じお願いを白水先生にも申しあげたが、先生も蝶類の記録収録などの作業を理由に応じていただけないまま急逝された。九州大学昆虫学についての生き字引のようなお二人が亡くなってしまった今、多くの歴史的な出来事が永遠に消えてしまうのが惜しまれる。

そのような出来事の一つをここに書き残しておこう。それは私が九大農学部に進学して昆虫学教室の学部学生となった 1956 年秋より前のことである。正確な日付は森本さんからお聞きしなかったが、恐らく 1953 年秋から 1956 年の春にかけてのことであつたろう。私が現在も研究している双翅目の 1 科にアミカ科がある。この科を日本で本格的に研究されたのが京都大学出身の北上四郎博士である。博士は京都大学でアミカを研究されたのちに、戦後 1950 年に熊本県立女子大学の教授になり、“The revision of the Blepharoceridae of Japan and adjacent territories” という、研究の集大成としてのアミカ科の総説を発表された。この論文が博士の絶筆となり、それを発表されて 2 年半後の 1953 年 7 月に逝去された。

「ひこさんがら」教室開設百年記念号にも触れたが、当時助手であった平嶋義宏先生と教務員の故大熊千代子さんの共同の研究室には液浸標本を入れたロッカーもあり、その一つに直径 10 cm、高さ 20 cm 程のガラス瓶が数十個収容されて、それぞれには小さい管瓶に無数の虫の液浸標本が入っていた。森本さんはこの液浸標本について次のように話して下さった。「これらの標本は先年亡くなった北上四郎博士のアミカなどの標本である。ある日の昼過ぎ、1 階の学生部屋から 2 階の会議室兼標本室に上って行ったら、中年の女性と小さな子供が訪れていて、江崎梯三教授が対応されていた。それが亡くなった北上四郎博士の奥さんとお子さんで、北上博士が亡くなられた後、残された標本

について、江崎先生と相談されて、九大に寄託するために持ってこられた。あのロッカーに入っているのはその時の標本である」とのことであった。これらの標本を収容していたガラス瓶や管瓶は、現在のように確りと密栓できるものではなかったので、エタノールは徐々に蒸発して、私が気づいたときには多くの管瓶の中身は乾いていた。その後、アミカの研究を始めた私は、これらの標本が、北上博士が一生をかけて集積され研究されたアミカ科の全コレクションであることを知った。北上博士の記載されたアミカの多くはホロタイプの指定がされていないので、これらの標本の多くは幼虫や蛹なども含めて多くの種のタイプシリーズであり、東亜のアミカ科の研究には極めて貴重で不可欠の標本であった。今後この中からレクトタイプを指定する必要がある。私が森本さんから上記の話聞くことがなかったら、これらの標本の由来やその重要性は永久に誰にも知られることがなかったかもしれない。これらの出来事は幸い私が森本さんからお聞きし、またここに記述したから残ることになる。

なお、これらの標本は、現在北海道でアミカ科の幼生期の詳細な研究をされている岡崎克則氏が、3年にまたがる年月を費やして、乾燥して瓶にこびりついたような標本を大変な忍耐と努力で丁寧に再生整理されている。特別の研究助成もなく全くの私費で献身的に整理されている岡崎氏の努力によって、北上博士の業績の基礎をなす標本類がようやく蘇り、日の目を見ることになる。森本さんをめぐる思い出の一つとしてここに書き残すことにした。

森本さんはこれ以外に昆虫学教室をめぐる様々な重要な出来事を詳しくご存じだったのだが、今となってはそれを蘇らすことは不可能になった。残念至極である。

以上森本さんを巡るいくつかの思い出を綴った。筆を置くにあたり、謹んで森本さんの御冥福をお祈りするとともに、長年のご指導に深甚の謝意を申し上げる次第である。森本桂さん、親しく言わせていただければケイちゃん、本当に有難うございました。今私があるのはあなたによるところが絶大です。謹んでお礼を申し上げます。

(本追悼文は、「昆虫と自然」第55巻4号の特集「森本桂先生追悼号」に寄せた私の記事を改変、加筆したものであることを、おことわりしておく。アミカの標本等についてはその記事が更に詳しい)

## 森本桂さんの思い出

(91) 宮武頼夫

森本桂さんが亡くなられてから、もう2年半近くが経ちました。みんなから「桂ちゃん」と呼ばれていた、あの独特の笑顔や、いたずらっ子のように少し口を尖らせて話す声が、今でも脳裏に蘇ります。森本さんは4年先輩ですが、高知県出身で、私が香川県出身だったので、同じ四国出身のよしみもあったのか、「頼(らい)ちゃん」と呼んで、可愛がってくれて、色々親切に指導して頂きました。九大の教養部から学部へ移る時に、私は研究テーマをキジラミ類の分類と決めていたので、立花山や若杉山などへ一緒に連れて行ってきて、採集の仕方などを教わりました。叩き網を使って採る方法(ビーティング)が良いというので、市内の剣道具店に行き竹刀の竹を買ってきて自作したりしました。また、大事なこととして、成虫を採集するだけでなく、それぞれの種が植物とどのように関わっているか、幼虫期を含めた生活史の解明、習性や行動など、フィールドに何度も足を運んで、じっくり観察することを教えられました。森本さんの研究テーマはゾウムシ類の分類と生態だったので、同じく植食性のキジラミ類の研究に、永年の経験から有益なアドバイスをして下さったのでしょう。この教えはその後研究に大変役立ち、私の研究スタイルの根幹となりました。新種を見つけても、寄主植物が判明しなければ記載発表をためらわせたのも、そのあらわれの一つでしょう。

当時昆虫学教室では、色々な昆虫のグループを研究する人たちがいたので、遠征採集旅行をした時とか(日帰りの近場の採集の時でも)、自分の専門の昆虫の採集だけでなく、他の人の専門の昆虫も採集してきて、お互いに分けあう習慣がありました。森本さんは信州や北海道などでせっせとキジラミを採集して、お土産に下さっていました。そのお返しの意味もあって、私は2種のキジラミの新種を記載した時、学名に森本さんに献名しました。一つは、1963年に記載したウワミズザクラキジラミ *Psylla morimotoi* で、彼が1959年7月に軽井沢で採集された標本がタイプシリーズに含まれています。もう一つは、ウラジロタデキジラミ *Aphalara morimotoi* で、1997年に森本さんの退官記念論文集が出版された時に献名したものです。他方、森本さんは3種の昆虫で私に献名してくれています。それらは、ミヤタケシロアリ(アマミシロアリ) *Reticulitermes miyatakei* (1968年記載、奄美大島三太郎峠産)、ウスミドリシギゾウムシ *Curclio rai* (1981年記載、石垣島米原産)、シナサワグルミノミゾウムシ *Rhynchaenus*

(*Orchestes miyatakei*) (1984年記載、大阪市東住吉区長居公園産)です。ウスミドリシギゾウムシの学名の *rai* は、当時私は「らい(頼)ちゃん」と呼ばれていたもので、そうにつけたのだと思います。シナサワグルミノミゾウムシは中国からの侵入害虫で、その後1995年の3月に雲南省での調査の際、シナサワグルミで見つけることができました。この献名合戦では、種数で私の方が負けています。

その後、森本さんは東京の林業試験場へ赴任され、私は安松先生のお計らいで故木元新作さんの後を継いで、ホノルルのピシヨップ博物館へ2年間留学したので、お互いに離ればなれになってしまいました。

森本さんとの最も思い出深い出来事は、安松先生のご配慮で1965年の5月から6月にかけて、タイへの調査・採集旅行でした。ゴキブリやトンボの大家の朝比奈正二郎先生、ゾウムシの大家森本さんと3人での、ひと月あまりのなんとも贅沢な旅行でした。タイへ行く前には、沖縄本島北部、台湾北部、香港でそれぞれ2-3日採集し、タイでは東部の *Khao Yai*、北部の *Chieng Mai*、中部の *Chieng Dao*、南部の *Songkijhla* と移動しながら、毎日が採集三昧でした。朝比奈先生のお父上が武田薬品株式会社の顧問をされていた関係で、行く先々で支店の方たちが盛大に歓迎パーティーを開いて下さり、空港やホテルからの送迎、フィールドへの車の手配など一切して下さったので、何一つ不安のない快適な毎日でした。旅立つ前に、朝比奈先生からネクタイを持参するようにとのお達しがあったのですが、それはバンコクで大使のランチパーティーに出席するからなのでした。白い半袖シャツにネクタイを結んで、足もとはキャラバンシューズという妙ないでたちでした。

毎日、午後にホテルに帰って標本を整理しながら、朝比奈先生や森本さんの専門の昆虫を渡すと、ご自分では採られていない種も多くあって、凄く喜んで褒められたのをなつかしく思い出します。草原で緑色のゴキブリを見つけて感動したり、一本の樹にハグロゼミの類が数十匹止まっていた、驚かすと一斉におしっこをかけられてびっくりしたこともありました。香港では、地面すれすれに飛び回るスソビキアゲハを見て、この世ではないような気分を味わいました。長い角を持つビワハゴロモ類、きらびやかなハゴロモ類、宝石のような青色や緑色のモモトハムシ類など、熱帯の昆虫の多様さに目を見張る毎日でした。残念ながら、この時季は乾期でキジラミ類の調査にはあまり適していなかったようで、多くの種に出会えなかったのは残念でした。でも、あの森本さんをひと月あまりも独占できたのを、うらやむ人は多いのではないのでしょうか？



この採集旅行はもう 56 年前になるので、当時の写真がなかなか出て来ず、お目にかけれないのが残念です。カラーとモノクロ両方の時代でしたが。

ここに載せている写真は、1982 年の冬に私が在職していた大阪市立自然史博物館へ、森本さんをはじめ、ハムシ研究家の木元新作さんとテントウムシ研究家の佐々治寛之さんの三人が訪ねてこられた時のものです。それぞれ標本を調べたり、標本の借用手続きをしたあと、研究室内と館の通用口で記念撮影をしました。さながら九大の昆虫学教室の同窓会のようにになりました。日浦さんはこの翌年、50 歳で亡くなり、今や私以外の人たちは全員鬼籍に入ってしまった。九大の先輩たちをこうして失ってしまうことはとても寂しいですが、遠からず私も仲間に加わる年齢になりました。

森本さんはその後、九大の昆虫学教室の教授として戻られましたが、なかなかお会いできる機会がなく、たまに日本昆虫学会の大会の時に会う程度でした。最後にお目にかかったのは、2015 年 9 月に九大で昆虫学会の大会が開催された時と思うけれど、どんな話をしたかは思い出せません。幸か不幸か、彼の最晩年には会っていないので、頭に浮かぶのは、あのスマイルと人なつこい話し声だけです。ご冥福をお祈りいたします。

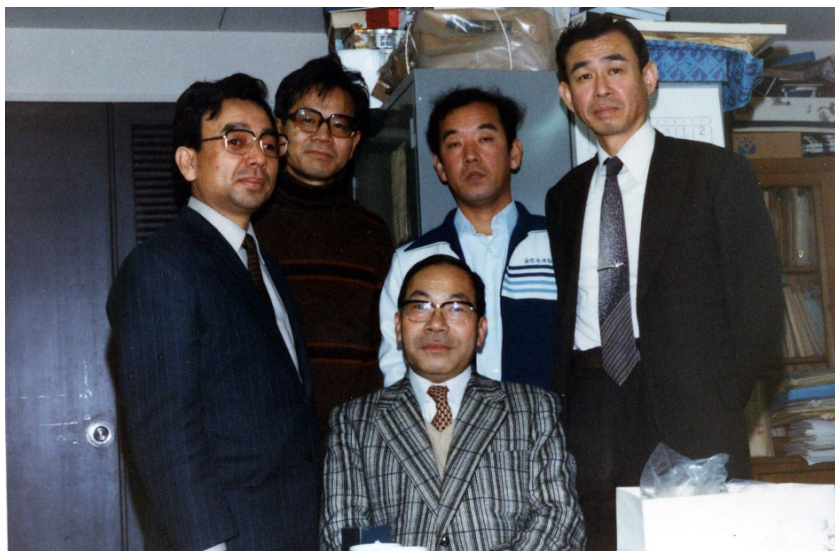


写真 1 大阪市立自然史博物館昆虫研究室内。左から、森本、日浦、木元、筆者、佐々治の各氏（1982 年冬）。



写真2 九大の甲虫トリオ（大阪市立自然史博物館通用口）。

## 森本さんと伊勢湾台風

(94) 河原畑勇

昭和 34 年 9 月九州大学農学部昆虫学教室助手の日高輝展氏を隊長に、大部屋（学生室）からは森本桂（当時 D2）、神谷寛之（当時 M2）の両ベテラン院生と新米学部生の河原畑勇（当時学部 3 年）が参加して、対馬の秋期昆虫相調査旅行が実現した。

一行は昭和 34 年 9 月 26 日早朝、死者行方不明者 5,000 人以上の大災害をもたらした伊勢湾台風が接近中であつたにもかかわらず、博多港から対馬行き連絡船大衆丸に乗船した。出航後、大衆丸はなにごともなく壱岐郷ノ浦港に接岸し、短時間の停泊後、次の目的地厳原港に向け対馬暖流の本流へと乗り出して行つた。郷ノ浦港を出てから一時間もしないうちに、船の揺れが激しくなつてきたのが感じられた。誰も居ない甲板に出て周囲を見回すと、見えるのは船を取り巻いてそそり立つ大波の壁ばかりであつた。これまで見たこともないような大波と、その底にへばりつくようにして波と風にもまれる大衆丸の姿に驚いたが、甲板では立っているのも困難な状況だったので、あわてて客室内に引き返した。すでに客室内でも立ってはいられない状態で、一行 4 人はマス席内にリュックサックをならべて枕とし、横になっていた。午後 3 時頃から船のゆれはますます激しくなり、船体がローリングまたはピッチングする度に、体は横になつたまま枕ごとマス席内をすべつて行つてはその縁で停止することをくり返す状態になつた。船室の丸窓から見えるのも海水になり、時々甲板上の通風口からも海水が滝のようになって客室に流れ込み、乗客の悲鳴がきかれるようになった。その時、引率者の日高さんと院生・学生代表の森本先輩は、少し顔色が悪くならつたように見えたが、神谷先輩は冷ややかなまなざしのまま平然としていた。午後 4 時頃、神谷先輩と新米学部生は大揺れに揺れる客室内で、パーサーが配達してくれたカステラを残さず平らげた。さらに、神谷先輩は手つかずのままだった日高、森本両先輩のカステラの有効利用を新米学部生に提案し、学部生も同意したのであつた。

風波はその後も衰えを見せず荒れ狂つたが、大衆丸はようやく午後 7 時少し前、厳原港に入港した。下船後、到着が遅いのを心配していた、対馬営林署の職員の方々のお出迎えを受け、対馬営林署有明寮に泊めていただいた。

翌朝（9 月 27 日）は昨日あれほどひどかつた風雨もすでにおさまり、薄日のさす天気となつた。一行は、対馬営林署の職員に案内され、有明山の麓から昆

虫採集を開始し、有明山山頂付近のアガガシ林内で、キリシマミドリシジミの越冬卵の採集にも成功した。翌春、九大農学部構内のアラカシで飼育した、対馬産キリシマミドリシジミ雌雄標本を白水 隆先生にお届けすることができたことを思い出した。

その翌日（9月28日）は更に巖原から南下して目的地の浅藻に到着したが、宿泊予定だった旅館は前年の台風で土台を残すのみの姿になっていた。ここでも、対馬営林署のお世話で民宿を世話していただき、夜にはゲンジボタルの何倍も明るい念願のツシマアキマドボタルにも巡り会うことができた。翌日、森本先輩は宿近くの小川に群れているアユなどには目もくれず、岸辺のミゾソバに集まる蜂類の採集に専念する姿があった。浅藻の背後には原生林の残る龍良山があり、原生林まで行きたかったが、時間の関係と道路事情が大変よくないとのことで諦めざるを得なかった。

対馬採集旅行4日間を通じて、伊勢湾台風のおかげで期待していた鮮魚料理は一度も食卓に登場せず、代わりの魚肉ソーセージで我慢せざるを得なかった。



写真 森本 桂氏（対馬 龍良山 1959年9月）

## 韓国調査と韓国人留学生の思い出

(154) 多田内修

森本桂先生は九大に赴任される前、林業試験場（現 森林総合研究所）でマツバノタマバエの研究をされ、大きな業績をあげられた。そのことから韓国の林業試験場との関係が深かった。現在日本では大きな被害は無くなってきているというが、韓国の中・北部地域では、当時から現在に至るまでマツバノタマバエの被害に苦しんでおり、韓国の最も重要なマツの害虫と言われている。特にアカマツの被害が大きく、針葉の根元に虫こぶを作り、被害を受けた葉は茶色に変色し枯れ落ちる。韓国北部の江原道を訪問した時、これがタマバエの被害ですと、茶色く枯れた広大なアカマツ林を見せられて衝撃を受けた。韓国からの森本先生に対する期待の大きさは、もっともなことと思われた。森本先生ご自身は九大に戻ってゾウムシの系統分類学の研究に集中したいと思っておられたと思うが、少々皮肉な流れになった。韓国の林業試験場から昆虫学教室に留学してきた院生や、他大学の修士から九大の博士後期課程に進学してきた韓国人院生が何人もいた。森本先生時代の留学生の大きな特徴と思う。全文章さんはマツバノタマバエを研究し、私は秋の終わりに材料収集のため彼と虹の松原まで一緒に行ったことがある。話し出すと止まらない全さんの説明を聞きながら、オレンジ色の大量の幼虫が溝に溜まっているのを目にした時には、その多さに大変驚いたものである。その後、李燦鏞さんや李鐘殷さんなど甲虫類を研究テーマにした学生も現れた。中には問題を起こして、私が韓国の金浦空港まで付き添い、ご両親に引き渡した人もいる。

森本先生は韓国との関わりが深かったことから、学術振興会の国際学術研究が採択され、韓国プロジェクト（1990-1992）を実施された。このことが韓国との交流の基盤になったと思う。私は韓国本土南部の智異山、北部江原道周辺、済州島の3地域の調査に加わった。智異山（1,915 m）は韓国本土の最高峰で、その山域は韓国で最初の国立公園に指定されている。山域周辺を広範囲に調査した記憶はあるが、印象に残っているのは、養蜂用の丸木の巣箱が日本の対馬などと違って地面に置く縦型でなく、横型で民家の軒下に吊るされていたことである。また、当時日本では珍しかった巣蜜が山の土産店で大量に売られていた。我々が普通食べるハチミツは、遠心分離機にかけ蜜だけを取り出しビンに詰めて売られているので、原形のままの巣蜜は興味深かった。

済州島には韓国最高峰の漢拏山（ハルラ山、1,950 m）がある。低地は市街地、

山麓は切り開かれ放牧地となり、800 m 以上は国立公園域で採集禁止になり、当時は入山料を取られた。標高は低いものの山頂近くには高山蝶が棲息し、火口湖が美しかった。確かご高齢の宮本正一先生が同行され、山頂までお元気に登られたと記憶している。日頃よく能古島などへ出かけられ足腰を鍛えられていた賜物であった。私はと言えば、8月の調査で半袖しか持たずに出発し、日差しが強く両腕が火膨れ状態になり、今でもその跡が多数のシミとなって残っている。この時の教訓で、以後東南アジアや砂漠地域の調査では必ず長袖のシャツを着るようになった。その後、濟州島には教室に留学された白種哲さんの案内などで何度も行く機会があった。韓国本土との海峡が浅く、生物相は基本的に朝鮮半島の出先と考えられ、距離的に近い対馬とはだいぶ異なることを知るようになった。

韓国北部の調査では、江原道春川を中心に五台山周辺でも調査し、もう亡くなられた李燦鏞さんはじめ教室に留学した韓国の方々にはたいへんお世話になった。ソウルから春川に向かうユクリム峠では、クロバエが次々と峠越えをして飛んでいくのを三枝豊平先生が見つけて、教えてくださった。長距離移動の興味深い観察をさせてもらった。近年、高病原性鳥インフルエンザの伝搬にこのハエが関わっているという報告が出ている。教室の卒業生には林業試験場出身の金鐘國さんや高明均さん達がおられるが、試験場ではきまってマッコリというお酒の歓迎会があった。一緒に行った教室の学生の中には酔い潰れた者もいた。森本先生はお酒に強い方で、相手方の試験場長を注意深く観察していると、テーブルの下にお皿だったか灰皿だったか忘れたが、さりげなくそこにお酒をこぼしているのを見て、韓国人の中にもお酒に弱い人もいるのだなと安心したものである。私はこのプロジェクトの後も李燦鏞さんを何度も訪ねて、春川周辺で調査をし、酒を酌み交わした。

韓国人留学生の中で忘れられない人がいるので書き残しておきたい。昨年たまたま教室の三田さんから、学位論文の製本があるのに学位を取った記録がない柳駿さんの件について問い合わせがあった。柳さんは韓国の原子力研究所から昆虫学教室に訪問研究員として滞在し、3年くらいかけて論文を書き上げ、いよいよ最終段階になった時であった。夜遅く研究室から自転車で宿舎に帰る途中トラックをよけようとして自転車ごと倒れ、その時に打ち所が悪く膝を複雑骨折してしまった。救急病院に入院したが、日本での保険には入っておらず入院治療費の高さに驚き、本人の希望ですぐに退院・帰国し、自宅で療養することになった。論文はほぼできていたので私が原稿をまとめて製本の依頼を出

し、九大農学部の記事にも投稿出版された。あとは足が回復したら再来日し、学位請求論文の公聴会をするばかりにしていた。ところが複雑骨折した膝がよく治らずに車椅子生活になり、とうとう再来日はできず、学位も取れずじまいに終わってしまった。もう随分前に脳梗塞で亡くなったと聞いている。さぞ無念だったと思うし、私もとても悲しい思い出となった。

私は前述のように、森本先生時代に教室に留学した韓国の人たちとその後交流し、その協力で個人的には何度も韓国に調査に出かけた。九大農学科でも韓国の大学との国際交流が始められ、数年続いた。森本先生の力もあったと思う。その第1陣として、私は農学科の3年生全員を引き連れて韓国各地を回った。韓国語で挨拶するために、出発前に挨拶文を留学生に韓国語に訳してもらい、フリガナを付けて練習した思い出がある。そのお返して韓国からも学生の一団が九大を訪問し、久住の高原農業実験実習場などを訪れ、学生間の交流が深まった。現在のように日韓関係がギクシャクしている時代から考えると、嘘のような時代であった。隣国であるだけに、長い歴史の中では政治的な関係はいろいろとあるであろう。いずれ相互理解が深まり、交流が復活することを願うとともに、日韓交流の道を開かれた森本先生に敬意を表し、心からご冥福をお祈りしたい。

## 森本桂先生の思い出

(188) 広渡俊哉

私は博士後期課程4年まで昆虫学教室で過ごし、1988年1月に大阪府立大学に赴任しました。以後25年間関西で生活していましたが、その間は森本先生と連絡をとることも少なくなっていました。しかし、2013年4月に九州大学に着任してから、先生とまたお会いする機会も増えました。私が九大に戻った当時、森本先生が研究されていたゾウムシの標本は、スペース的な問題で農学部と総合研究博物館に分散していました。この時期、九州大学農学部では、箱崎から伊都へのキャンパス移転を目前にしており、日本最大級の昆虫標本の引越しが喫緊の課題でした。まずは、その準備段階として、甲虫類の標本を箱崎キャンパスの総合研究博物館に集中させるという方針のもと、森本先生のゾウムシの標本や中條先生のゴミムシダマシの標本などを、移転前に博物館に移しました。森本先生は、退職後、農学部2号館で標本の整理などをされていたようですが、スペースが十分になかったのでずいぶん苦労されたことと思います。いずれにせよ、ゾウムシ標本が一箇所に集まり、森本先生ご自身も喜んでおられました。最近では、博物館の丸山宗利さんらの尽力もあって博物館にゾウムシ関係の文献も標本とともに集積され、ゾウムシを研究するのに理想的な環境ができました。このような環境が、先生が退職されてすぐのお元気づちに整備できていればとつくづく思います。

私が学生の頃、先生は学生たちができるべく多くの昆虫の形態や多様性を学べるように、昆虫の群集調査や群集を扱った研究の補助をするような機会を与えて下さいました。私が大学院生の時に、韓国からの留学生高明均さんの研究テーマで、熊本市の林業試験場（現在の森林総合研究所）で森林の土壌節足動物を林分ごとに比較するという研究のお手伝いをしたことがありました。その当時はあまり意識していませんでしたが、森本先生は林業試験場に勤務されていた経験があったので、調査地の設定などがスムーズにできたことを知りました。高さんは、昆虫だけでなく、クモ類やその他の節足動物を比較するために、大量のサンプルを同定していましたが、高さんだけでなく、私自身にとっても土壌動物の多様性やその調査方法などについて学ぶよい機会となりました。

当時、森本先生は九州大学農学部の助教授で、毎日朝早くから教室に来られ、研究に専念されておられました。先生が早朝から研究に取り組まれるスタイルは一貫しており、退職されてからも変わることはなかったようです。また、昼



休みには、平嶋義宏先生や大熊千代子さんらと談笑されていたのが思い出されます。私が修士課程を修了する年、森本先生から「ある企業が修士修了の学生を募集している」という話がありました。「九大から人を採りたいといっているので絶好のチャンスである」というようなお話でした。そこで、その年の修了予定者 3 名のうち、ずいぶん迷った末に私が面接を受けることとなりました。その当時、博士後期課程に進学を考えていた私にとって、一般企業に就職するかどうかは、人生の岐路となる大きな決断でした。私は勘違いし、てっきり採用されるものと思ってろくに準備もせずに採用面接に臨みましたが、その態度が露呈してか、結果は不採用でした。もし採用されていたら、私の人生は大きく変わっていました。「人生、こんなはずじゃなかった…」森本先生は、よくそのような話をされていたこと覚えています。先生ご自身、想定外のことを多く経験されたようですが、どんな状況にあっても「人生、思い通りにはならないこともあるけど、それが悪いことばかりではない」という意味合いで、困難を乗り越えて行くためのアドバイスだったと受け止めています。

さて、森本先生は、退職後も箱崎の農学部や総合研究博物館で研究を続けておられましたので、伊都キャンパスとのご縁はあまりなかったかもしれません。2015 年、当時学部 3 年だった昆虫学教室の辻尚道君が、将来を有望視される学生を対象とする山川賞を九州大学から授与されました。その受賞者の講演会が、2016 年 10 月、伊都キャンパスの椎木講堂において九州大学アカデミックフェスティバルの中で開催されました。森本先生は奥様を同伴されてその講演会に臨席されていました。この時、森本先生と少しお話をすることができましたが、これが直接お会いできた最後の機会だったように思います。講演会では、辻君のゾウムシ研究についての熱の入った発表を聴いておられました。その時、森本先生はご自身の後継者が評価されて、とても嬉しそうなお顔をされておられたのが印象的でした。これからも、辻君をはじめとする若手のゾウムシ研究者の活躍を先生に報告できればと思っています。

<脚注>

この報文は「昆虫と自然」 55(4) (2020 年発行) に掲載されたものに加筆修正したものです。

## 森本桂先生を偲んで

(196) 阿部芳久

森本桂先生の思い出は「昆虫と自然」の追悼号(2020年4月号)に執筆しました。そこで、九州大学箱崎キャンパスで2019年10月5日に開催された「森本桂先生を偲ぶ会」で読み上げた弔辞を投稿させていただきます。あらためて先生の御指導に深く感謝申し上げます。

-----

### 弔辞

森本桂先生の御霊前に、日本昆虫学会を代表して謹んでお別れの言葉を申し上げます。

先生は、シロアリやマツノマダラカミキリなどを主な研究対象とした森林昆虫学に関する御研究、そして学生時代から今まで継続されたゾウムシの分類学的研究など、卓越した業績で世界的に著名な研究者でいらっしゃいました。

また、先生は教育にも熱心で、私が学部の2年生であったときに *Zoological Record* の引き方を教えていただいたことが、懐かしく思い出されます。そして何よりも、毎朝7時前から研究室に出てこられて研究に打ち込む先生の姿勢から学ばせていただきました。御生前の御指導に対し、改めてお礼を申し上げます。

日本昆虫学会におきまして、先生は副会長、会長を歴任され、名誉会員の称号が贈られています。先生の御遺志を継いで役員一同、本学会をさらに発展させてまいる所存です。

森本桂先生の御生前の御功績に敬意を表しまして、弔辞といたします。

2019年10月5日

日本昆虫学会 会長 阿部芳久

## 森本桂先生との採集旅行の思い出

(200) 野村周平

2019年9月に亡くなったわが恩師、森本桂先生と筆者との出会いについては、日本甲虫学会和文誌、さやばねニューシリーズ(36号 pp.85-86)に記述したが、それ以外にもたくさんの先生や虫友たちとの思い出が脳裏に去来する。今回はその中でも、いろいろな人たちとの出会いと交流を含む一つの採集旅行について記録しておきたい。

1983年6月、筆者は学部3年生で、ようやく昆虫学教室に加わらせていただいて、しかしまだ席はいただけず、学部の授業や実験を受けながら、昆虫学教室に顔を出すようなことになっていた。その頃、森本先生(当時助教授)と交流のあった仙台の渡辺徳さん(故人)に招かれて、森本先生と先輩の沢田佳久さんとの3人で数日間、仙台周辺の好採集地、栗駒山、船形山、蔵王の各地点を泊りがけで採集して回るようになった。

渡辺徳さんは、若い人は知らないかもしれないが、当時有名な市井の昆虫研究者で、「対馬の蛾類」や「屋久島の蛾類」(いずれも1980年)を著している。その基礎となった対馬や屋久島での灯火採集なども渡辺さんが自ら現地へ乗り込んで実施されたものである。渡辺氏は甲虫もお好きで、対馬ではまだ日本から未記録であったキンオニクワガタを発見したり、屋久島からヤクシマオニクワガタを初めて発見し、命名者の黒澤良彦博士から、新種名に献名されている。

仙台市内の渡辺さんのご自宅に呼ばれた我々3名は、渡辺さんの虫仲間であるハナバチ研究者の郷右近勝夫博士も同行し、まずは栗駒山へ採集に赴いた。筆者はまだこの頃、アリヅカムシの採集は駆け出しだったので、温湯(ぬるゆ)、駒の湯と、山麓の有名採集地を訪れたにもかかわらず、なかなか成果を上げることができなかった。一般的な理解として、日本列島のアリヅカムシは、北へ行くほど種数が乏しくなり、特に初心者にとっては採集が難しくなる。筆者は初めての東北地方でのアリヅカムシの採集で、どこに手を付けていいものか大いに戸惑い、思い通りの成果が挙げられないことに苦しんだ。

そのような筆者の苦悩をよそに、渡辺さんら他の4名は、楽しげに東北の山々を逍遥して、それぞれの専門群の採集にいそしんでおられた(ように筆者には見えた)。森本先生と沢田さんは、主にピーティングを繰り返して、樹葉上のゾウムシを採集していた。やはり日当たりのよい梢や、半日陰の林縁などで成績

が良いようだった。それに対して筆者は、木々がよく茂った、薄暗い森の真ん中で、落葉をかき集め、ビーティングネットの白布の上でザルでふるって、歩き出すアリヅカムシを1個1個、吸虫管で吸うという採集を繰り返していた。ツルグレン抽出や各種のトラップのように、もっと効率的な採集法は、当時としては思いもよらなかった。そういった点で当時の筆者は、今思い起こしても残念なほど未熟だった。

そしてもう一つ筆者が残念に思ったのは、ゾウムシ屋さんと一緒に採集しようとする、森の中を歩く速度と、成果が上がる環境がひどく違って、なかなか両立しないという点にある。ゾウムシ屋さんは、多分カミキリ屋や雑甲虫屋も同じと思うのだが、山道に沿って周囲の茂みや梢をたたきながら進み、良さそうなどころでは10分ほど時間をかけてじっくりとたたきこむこともあるだろう。しかしいづれにしても1時間に数百メートルくらいは進むだろう。

しかし筆者は、アリヅカムシを採集する人がすべてそうとは思わないが、まずは1か所好い場所を見つけると、最低1時間ほどは同じ場所でザルふるいを続ける。アリヅカムシがそこそこ採れるような場所だと、その周囲には同じような環境がいくつかあって、スポットごとに採れる種が少しずつ違う。ということも少なくない。したがって、いい場所に行き当たったら、数時間でも半日でも1日中でもそこでふるい続ける、というのが常道だ。むやみに歩き回る時に限って、収穫は少ない。

それがベストということでもないかもしれないが、少なくとも当時の筆者の採集はそうだった。だから、ゾウムシ屋さんと一緒に採集に出かけると、たいがい最初スポットに行き着く前に、「次へ行きましょう」ということになってしまっ、次に行ったところではまた、最初スポットが見つかる前に「次に行きましょう」ということになってしまう。そんなことで何匹も採集しないままに1日の作業が終わってしまう。そういうことがあったので、その後筆者は、他の群の虫屋さんと一緒に採集に行くことは控えるようになった。一緒に行く時でも、大変申し訳ないが別行動にさせてもらった。

この森本先生との採集旅行以後、筆者は何度か夏休みに東北地方へ一人で採集旅行に出かけるようになった。この時に訪れた船形山系の二口峡は非常に良い採集地であることが分かったので、その後も何度か訪れてアリヅカムシを採集している。印象に残っているのは、よく知られた普通種であるアナズアリヅカムシ *Batrisceniola dissimilis* (Sharp)の長翅型♂(図1A)が、当地でのみ数頭採集されたことや、珍種の一つであるニッポンハラクボアリヅカムシ

*Batriscenellus (Nipponoscenellus) transformis* Nomura (図 1B) が当地で採集され、これをホロタイプとして博士論文で新種記載したことなどがある。

この時の採集成果は、渡辺さんの晩年の著作である、「宮城県の甲虫」(日本鞘翅学会刊, 1989) に収録されている。これより以前に、東北地方からのアリヅカムシの記録はほとんどなかったので、東北地方のアリヅカムシを語る上では、出発点となる重要な業績となっている。その後の筆者の研究に大きな影響を残した楽しい東北での採集旅行も、もはや遠い過去になってしまった。渡辺さんは「宮城県の甲虫」の刊行後まもなくして亡くなられ(1990年1月)、森本先生もその30年後に旅立ってしまわれた。昭和は遠くなりにつれ、東北の山野を歩いて、楽しみにゾウムシを採集されていた森本先生のお姿が思い起こされる。恩師のご冥福を心よりお祈りする次第である。

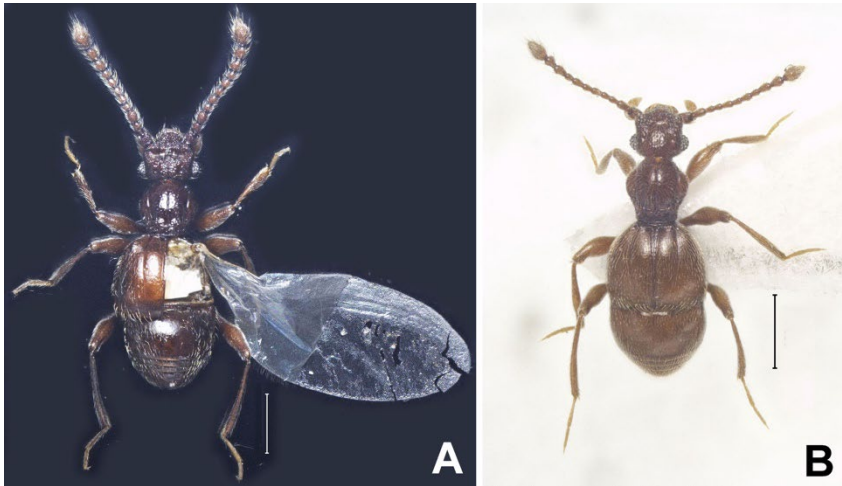


図 1 A アナズアリヅカムシ有翅型♂ B ニッポンハラクボアリヅカムシパラタイプ♀ (いずれも宮城県二口峡で1987年7月採集、スケールは0.5 mm)。

## 恩師、森本桂先生との思い出

(228) 小島弘昭

蝶が好きで大学（東京農大）に入学したが、蝶では研究テーマが見つげづらいという周りからの助言もあり、当時はしぶしぶゾウムシを始めようと思った。以前から姿形が気にはなっていた虫だった。昆虫学について、右も左も分からない大学入学したての頃で、ゾウムシを集め始めてから森本先生を知った。

### 先生との出会い

東京での鞘翅学会の集まりで、ゾウムシを収集されていた故宮川澄昭さんに紹介頂いたのが、先生との初めての出会いであった。当時、クモゾウムシに興味を持ち始めていた私は、その分類をやってみたく先生に申し出たところ、「それは私がまとめようとしているグループです」と言われ意気消沈した。大学2年の冬だった。一時はゾウムシを諦め、キクイムシをテーマにしようかとも考えたが、採集を継続する過程で地味なハナゾウムシが候補として浮上してきた。翌年の鞘翅学会でそのことを先生にお話ししたところ、「それは自分も手をつける予定はないから、やってみたらどうですか」とのご返事を頂いた。以来、ハナゾウムシやその近縁群であるアシプトゾウムシ、ツブゾウムシ、ノミゾウムシなど地味で小形種の多いゾウムシ亜科の研究を、大学院で手がけることになった。

博士の学位取得後、ポスドク2年目にロンドン自然史博物館へ留学する機会に恵まれた。その際、ゾウムシを始めてすぐその魅力に取り付かれたクモゾウムシをはじめ、クチプトゾウムシやオサゾウムシを手がけたいとお伝えしたところ、先生はすんなり首を縦に振って下さった。すでに退職されていた先生は、今後まとめられるグループを日本産のクチプトゾウムシとクチカクシゾウムシ、キクイゾウムシと決められていて、それ以外のグループに関して私が扱うことを認めて下さった。

### 先生との食事や採集

先生は時々、学生を食事に誘って下さり、先生の運転で大学近くのレストランに出かけた。道中の車内で、何度か先生の運転免許取得のお話を伺った。免許を取られたのが年齢的に遅かったが、技能も優秀で教官も驚かれたとのこと。

道中、先生の運転に毎回ヒヤヒヤしていたのは私だけだろうか。先生は我々にステーキやハンバーグといったスタミナのつく料理を勧められ、ご自身も同じボリュームのものを召し上がられていた。いつもエネルギーな先生の原動力は、この食事にもあったのだと思う。

お正月（元旦）は先生の誕生日で、帰省をせず年越しをしていた学生をご自宅に招いて下さり、おせち料理とお酒をご馳走になるのが恒例となっていた。ご長男の哲也さんにもこの席で何度かお会いした。先生のお話に鋭く切り込む哲也さんにたじろぐ先生。また、普段見ることのないリラックスした先生のお姿がとくに印象に残っている。

院生時代、先生との採集で記憶に残るものの一つに彦山合宿がある。先生が企画されたもので、教室一同で出かけた。各種トラップを仕掛け、夜は実験所内の広間で宴会後、布団を敷き詰め就寝した。翌朝目が覚めると、部屋には先生と私以外に人影がなく、廊下で寝ている方もいた。早めに就寝した先生と私のいびきがひどかったようで、仕方なく部屋を出たとのことだった。

八重山にもご一緒する機会があり、奥様も同行されていた。我々がゾウムシを探している間、先生は奥様に「蝶でも採集していなさい」と網を振らせていたが、無理矢理感が否めなかった。この時、先生は一見つまらなそうに見える農地や人里周辺の環境を選ばれては採集をしていた。それまでの私は、少しでも自然度の高そうな環境で採集することが多く、先生のこの視点はその後の採集で大変役立っている。

九大博物館で職を得ることができた私は、日本ゾウムシ情報ネットワーク（JWIN）の調査会に先生と参加し、私の運転で岐阜や和歌山、福島、熊本を回った。先生の採集スタイルは叩き網と掬い網を同時に行うため、木本につくゾウムシに加え、草本につくものもしっかり採集されていた。私は叩き網に加え、長竿を利用した高所の掬い網を行い、種数でも先生に追いつけるよう励んだ。

農大に移ってからは JWIN の調査会で岩手と群馬に出かけ、先生と採集する機会があったが、その後、私の調査会への参加が遠のき、先生とのコンタクトはメールや手紙でのやり取りが中心となっていた。

## 先生との再会

直接お会いする機会が少なくなる中、先生の入院の知らせを九大の辻君より受けた。彼に調整頂き、吉武君とお見舞いに行ったのが、久しぶりの先生との再会となった。その後、リハビリを続けられていた先生のご自宅に、今田君を

含め4名でご挨拶に伺った。一時は研究室に来られるまで回復されたが、再入院をされたとの知らせがあった。屋久島で調査をした帰路、福岡に寄って一人、先生のお見舞いに行くことにした。事前に奥様とも連絡を取り、入院されているという病院に向かったが、そこに先生はいらっしゃらなかった。奥様に連絡を入れても、ご自宅の電話に繋がらず、近隣の病院も回ったが、個人情報のため詳細を知ることはできなかった。私はなす術がなく、九大博物館の丸山君に連絡を入れ、彼のところで待機させてもらうことになった。夕方、ようやく奥様と連絡が取れ、転院されたとのことで、先生のもとへタクシーで駆けつけた。先生はお休みになっていたが、目が覚め私の存在に気づき何度か起き上がろうとされたが、思うように体が動かなかった。また、必死に話しかけようとされたが、喉に痰が絡んでいたせいか、言葉が聞き取れなかった。帰りの飛行機の時間も迫っていたので、今度先生が起き上がった際には、思い切って抱きかかえてみようと思いついた。そのタイミングが訪れると、私は先生を抱きしめて、額や手の甲に何度かキスをしていた。先生は何が起きているのか、訳が分からない状態であったと思う。先生と再会をお約束し、私が部屋を出る間際、先生は片手を振って、「あ、り、が、と、う」と言葉にされたことだけは聞き取れた。福岡を発つ前に再度奥様にご連絡したところ、「良い病院が見つかって良かったです。今、主人は熱があるけど、下がれば元気になるので、また来て下さい」とのことだったので、私も少し安堵し帰京した。それからひと月も経たずして、先生の訃報を知らせるメールが届いた。あのキスが、私が大好きな先生への最初で最後の愛情表現となるとは思ってもいなかった。

先生との思い出は尽きなく、先生との時間は刺激的で、とても充実したものであった。たくさんの経験をさせて頂くとともに、多くのことを学ばせて頂き、私の人生にとって最高の贈り物を頂いたと思っている。森本先生、これまで本当にありがとうございました。私の心の中で、先生は千の風になって大きな空を吹きわたっています。



## 森本先生の思い出 -先生と森林総研九州支所-

(237) 後藤秀章

私は昨年 10 月まで、森本桂先生がお勤めであった熊本市の森林総合研究所九州支所（旧林業試験場九州支場）に 17 年在籍していました。現在は高知市の四国支所に異動になっています。追悼文を書くために先生の略歴を見ますと、先生は高知市の出身。ご縁を感じているところです。

私が九州支所に異動になったのは 2004 年のことで、すでに森本先生が九州大学に出られてから 30 年近くが経っていましたが、それでも先生の痕跡がいくつも残っておりました。標本庫には”Morimoto”のラベルのある大量の標本があり、それもゾウムシや甲虫だけでなく、概ね全ての分類群がそろっています。これは九州支所の前身である林業試験場九州支場の創立 30 周年の記念誌に載せた、立田山（九州支所の実験林のある裏山）の昆虫リストを作製した時の標本です。このリストも都市近郊林のファウナを研究するうえで大変貴重なものですが、標本は分類学者でなくてはここまでやらないだろうという、美しい標本がずらっと並びます。しかもすべて同定済。そういえば私が九州に異動したときには、まだ森本先生がおられた頃を知る事務職員の女性がおられました。こうした標本を作っていたのを見ていたのでしょうか、先生のことを、「本当に虫がお好きな方でしたよね」と懐かしそうにおっしゃっていたのが印象に残っています。あとは古い飼育道具の数々。それらの実験器具は、おそらくマツ喰い虫（マツ材線虫病）研究の頃のもので、森本先生といえばゾウムシですが、試験場時代にはマツ喰い虫の研究でも多大な業績を残されています。私が学生時代に先生が、「マツ喰いのプロジェクトが始まった時には、もう原因がマダラ（マツノマダラカミキリ）だと分かっていたね、防除法もあったんで、やるのがなかったんだ。」とおっしゃっていたのを、覚えています。この防除法は殺虫剤の空中散布で、環境への影響などから賛否のあるところですが、当時としては貴重な松を守るための画期的な方法でした。また、「飼っているマダラのエサ替えが大変で、日曜に子どもに手伝わせてエサを替えてから、家族で遊びに行ったんだ」という話もされていました。

森本先生は、学生が研究テーマを選ぶ際に、その就職先までを考えておられたようでした。私がキクイムシ類をテーマに選んだ際には、森林総研への就職を考えておられたようで、私には林業試験場時代の思い出話を頻繁にされてい

たように思われます。私は研究面では不肖の弟子でしたが、就職だけは先生の思惑どおりになり、森林総研に入ることが決まった際には大変喜んでいただきました。そういえば、キクイムシをテーマに選んだすぐ後に、九州支所に同行させていただきました。別の用件のついてだったのですが、私を森林総研に紹介しておく意図もあったでしょう。そのときのことで最近になって気がついたことがあります。九州支所からの帰途、植木のインターまでの途中で、先生がスイカを買ったのを覚えているのですが、通常走る国道3号線沿いには、その時の店がないのです。なんとなくずっと気になっていたのですが、最近になってそれが田原坂を抜ける旧道上にあるのを見つけました。先生は熊本にも長くお勤めでしたので、そのような場所にあるお店をご存じだったのでしょうか。一度寄ってみようと思っているうちに異動になってしまったので未だ果たせていません。そのときのスイカはゼミ室で、学生みんなで食べたのですが、本当に甘くておいしかったです。今でもスイカを食べると、時折そのときのことが思い出されます。

## 森本先生に叱られた私の道草

(239) 今坂正一

2019年9月3日に森本桂先生が逝去された。日本産ゾウムシ総説3冊目となるキツイゾウムシ科の完成が間近と伺っていたので、特に残念な気がする。先生も心残りであったろうと思う。

私が九州大学の昆虫学教室に研究生として通うようになったのは、1993年冬のある大会の懇親会で、先生から「九大に来ませんか？」とのお誘いを受けたことによる。ちょうど、一身上も途方に暮れかけていた時期だったので、気を奮い立たす意味からも、お話を受けることにした。

1994年秋から月に1度、先生のご都合を確認した上で、昆虫学教室へ通い始めた。研究テーマはジョウカイボン科の系統分類。初日、先生は基礎的な文献20編余りのコピーを用意された上で、今後調査すべき事を列挙したメモと、研究に必要な文献等の入手方法を教えてくださった。毎月、その月に調べたこと、解ったことをメモにまとめて報告した。先生はその上で次になすべき事を教えてくださった。

先生から、系統分類に使用する重要な形質として、♂交尾器と膜状骨を調べてみるよう勧められたので、ジョウカイボン科のみならず、甲虫全体、さらにゴキブリ、ハサミムシなど縁の遠い目まで調べて、先生から「いいかげんにしろ!!」と叱られた。論文にしても、先生は、「分類に必要最小限の表現で、正確に書くべきである」とのお考えであったが、私はむしろ、その群を調べ始めた動機とか、結論に達するまでの紆余曲折とかが書きたかった。この事でも先生から叱られた。

退官後20年も毎日大学へ通って、自身に課せられた研究を懸命に続けられた先生からすると、道草の多い私は、我慢できるものではなかったと思われる。それでも、先生の指導の賜として現在の虫屋の私が存在しているわけで、先生のお誘いを心から感謝している。

森本先生、長い間のご研究ご苦労様でした。安らかにお休みください。合掌

## 森本桂先生との出会い

(253) 吉武 啓

仙台生まれの昆虫少年だった私が、“ゾウムシ”という生き物に明確な興味を抱くようになったのは中学3年生、心理学者である父が定期購読していた『アニマ』という自然科学雑誌のバックナンバーを読み漁っている時に、ある号に標本箱特集が組まれているのに気づいたことがきっかけだった。その中の「わたしの標本箱」というコーナーに数名の昆虫愛好家と共に故・宮川澄昭先生が寄稿されており、伊豆諸島産ゾウムシ類を収めた標本箱のモノクロ写真が文章と共に掲載されていたのである。それを目にした当時、まだ大形昆虫の標本しか作ったことがなかった私は、1 個体ずつ三角台紙に糊付けされたゾウムシ類がラベルよりもはるかに小さいという事実にも驚いた。しかし、私が何よりも大きな衝撃を受けたのは、それら微小なゾウムシ標本がぎっしりと詰め込まれた、コルク敷のインロー箱それ自体が醸し出す独特の雰囲気に対してであった。それはとても神秘的で、たくさんの建造物が林立する複雑な都市構造のような印象を与えるものであり、それまでに私が目にしたどんな標本箱よりもはるかに魅力的だったのである。自分もこんな標本箱を作りたい、そう渴望してゾウムシ類を蒐集し始めた。今思えば、この時私が魅せられたのはゾウムシの多様性そのものであり、件の標本箱は Morimoto & Miyakawa (1985) の証拠標本コレクションを収めたもので、正に森本先生との合作だったわけである。

母に連れられて初めて渋谷の志賀昆虫普及社を訪れ、“れっきとした”標本箱や標本作製用具を購入したり、父に頼んで『月刊むし』や『昆虫と自然』を定期購読し始めたのもこの頃だった。ようやく憧れの世界に足を踏み入れられたようで、何だか誇らしかった。当時の私は全くの情報弱者だったので、旺盛な知識欲を満たすべく貴重な情報源であった手元の文献を何度も読み返した。しかし、かなり本格的にはなつて来たとは言え、私の昆虫趣味は、この時はまだ文字通り児童に過ぎなかった（しかもこの頃はまだゾウムシよりもクワガタムシが好きだった）。

高橋雄一・保谷忠良両先生との繋がりから私の昆虫趣味の師匠となった児玉雅一氏の影響で、その他の甲虫にも幅広く興味を抱くようになったのは高校入学後暫らく経ってからであった。当時の私は、児玉氏に連れられ、南東北各地で実にさまざまな甲虫種の採集を経験していたほか、宮城昆虫地理研究会にも入り（私と同年代の虫屋は一人もいなかった）、目学問耳学問で仕入れた知識を

以って実家の近所の里山でせっせと自力での採集経験を積んでいたが、クワガタムシを除けばやはりゾウムシをはじめとする食葉群が一番のお気に入りであった。私と森本先生との“出会い”は、まさにその頃、食葉群の種同定のために児玉氏から拝借する形で、初めて原色日本甲虫図鑑第4巻（保育社）（以下、原色甲虫図鑑）を手にした時であった。当時の私にとってゾウムシの同定の手引きは他になかったことから、共著者欄に“九州大学農学部教授 農学博士 森本桂”とごく簡潔に記してあるだけであったが、その名前と肩書きは深く私の脳裏に刻み込まれた（その後『アニマ』のバックナンバーを読み返していたら、元は林業試験場で松枯れの研究をされていたことが分かった）。他の多くの甲虫屋たちが、私と同様にこの図鑑を介して先生との“出会い”を果たしたはずである。原色甲虫図鑑と睨めっこし、各種の全形写真と短い解説の意味を深読みしながら、私はゾウムシ屋の卵として着実に成長して行き、宮城昆虫地理研究会誌上で数編の報文を発表したりもした（知識先行で生意気な子供に付き合っただけで下さった宮城の先輩虫屋さん達には感謝しかない）。思い返せば、間接的ではあるが、当時から私は先生の教え子になっていたとも言えるわけである。しかし、この図鑑だけではわからないことだらけで、一つわかると新たにたくさん疑問が湧いてくるような状態であった。この頃、一度ゾウムシの同定について森本先生にお便りを出したが、お返事をいただけなかったと記憶している。

その後、2回の大学受験を経て、1996年春、故郷仙台を離れ、東京農業大学の世田谷キャンパスで入学式直後に昆虫学研究室（以下、昆研）の扉を開いた。ここで私は程度の差こそあれ実に多くの方々の世話になり、同時に影響を受けた。無知で馬鹿で我儘で糞生意気な若輩者に過ぎなかったが、伸びしろだけは大きかったし、若いだけあって感受性も強かった。全面的に初体験ばかりで本当に刺激的な4年間で、もちろん失敗が多かったが、何しろ勢いがあったので、「恥も上塗りして磨けば光る」という状態だった。昆虫分類学徒としての私にとって有意義な出会いの半分は昆研時代に済んでしまったと言っても決して過言ではない。その中で森本先生に直接繋がった出会いを挙げるとすれば、宮川澄昭先生と小島弘昭さんと巡り合ったことであり、それは私にとって間違いなくその後の研究人生の方向性を決定づける出来事であった。

昆研時代の私が最初にやった事は、ゾウムシの標本を集めては、辞書を引き引き原記載論文等の文献を読み解いて種まで同定することであった。言わば、「原色甲虫図鑑の先を行く」修行を積んでいたわけであるが、日本産種が対象

であったため、必然的に主として森本先生の論文に触れることになった。また、私のゾウムシ一般に関する形態学的知識は Morimoto (1962) “Comparative morphology and phylogeny of the superfamily Curculionoidea of Japan”を繰り返し参照することによって培われて行った。それでもやはり自分では解決できない疑問が山ほどあって非常にもどかしい思いをしていたところ、日本鞘翅学会の例会の際に宮川先生と知り合い、自分で同定できなかつた標本や同定に自信がない標本を見ていただくためご自宅にお邪魔することになった。確か学部1年生の秋で、当時昆研の主任教授を務められていた渡辺泰明先生にご紹介いただいたと記憶している。長身で物腰柔らかな老紳士だった。

宮川先生のお宅は新宿区百人町の国立科学博物館新宿分館にほど近い場所にあり、青い屋根が目印だった。『アニメ』で見て憧れた標本箱そのものを最初に見せていただき、とても興奮したことを今でも思い出す。私の予想に反し、宮川先生宅での同定作業は直接先生が行うわけではなく、ゾウムシに纏わる先生のお話を伺いながら、私自身が宮川コレクションに含まれている森本先生同定の参照標本と自分の標本とを比較するというものであった。宮川先生の話は実に多岐に渡るものだったが、やはり森本先生関連のものが中心で、お二人の親交の深さが窺えた。その場で解決できなかった標本については「今度森本さんが家に来た時に見てもらおうから」ということで一旦お預かりいただき、後日受け取ることになった。

「森本さんに見てもらった」との一報を受けて再びご自宅にお邪魔すると、宮川先生がメモを見ながら各標本に関する森本先生の見解を説明して下さった(併せて「誰々何年を参照すること」などの指示もあった)。受け取った標本を見ると、独特の筆跡で森本先生の同定ラベルが付されており、雲の上の存在だった先生と目に見える繋がりが出来て何だか誇らしい気持ちがあった。その後、同じような形で宮川先生を介した森本先生との間接的なやり取りが何度か続いたが、残念ながら宮川先生が眼の手術を受けたのを境に途切れてしまった。ただ、私がゾウムシの分類学者を志していることは宮川先生から森本先生に伝えられており、この時点で「ゾウムシの分類がやりたいなら、語学と描画ができないといけない」という森本先生からの伝言は受け取っていたし、森本先生をよく知る宮川先生のお話から森本先生の人物像を今までよりも具体的に頭に思い浮かべ、勝手に親しみを感じるようになっていた。

昆研の室員となった直後から“コジマさん”というOBがいて、その人は昆研のペット犬である“コジ”の拾い主で、日本産ハナゾウムシ類の分類で卒論を

書いた後に九州大学大学院（以下、九大院）に進学し、森本先生の下でゾウムシの分類学的研究をしていることは知っていた。当時 Kojima & Morimoto によるゾウムシの分類学的論文が量産されていて、よく参照していたし、普段から「“コジマ”はこうしていた」とか「“コジマさん”はこう言っていた」とか、何かにつけて比較されることが多かったので、いつしかそのような昆研の先生や先輩方の証言を自分なりに解釈しながら、一度も会ったことのないゾウムシ研究の先輩“コジマさん”を目標にする形で、試行錯誤でゾウムシの採集や標本作製、解剖やスケッチの修行を積むようになっていたのである。その一方、研究面以外での“コジマさん”の武勇伝の数々をいささか誇張された形(?)で聞かされ続けていたため、自分の中では「あらゆる意味で怖い先輩」というイメージが形成されていた。

私が学部2年生だった1997年夏に東京で開催された昆研OB会が“コジマさん”との初対面だったと思う（記憶が曖昧だが、会場内でOBの野中俊文さんが二人を引き合わせて下さったようだ）。本物の小島さんは自分が勝手に抱いていたおどろおどろしいイメージとはかけ離れた感じの方だったので、ガチガチに緊張しつつも内心ホッとしていた。小島さんとは初対面にも関わらず極めて近い距離間で本当に色々な話ができたとくに、ゾウムシの分類学的研究や九大院への進学について直近の先駆者から具体的なアドバイスをいただくことができ、自分にとっては大変有意義な対話で、研究に対するモチベーションが大いに高まったことを記憶している。

「本気でゾウムシの研究するのなら、他の虫で遊んでる暇はないんちゃう？」まだミーハー虫屋的キャラクターを隠し切れなかった自分が、「虫屋であることが研究という脈絡の中ではディスアドバンテージになり得る」ということを明確に意識するようになったのは、小島さんにこう言われた瞬間からであった。圧倒的な研究業績を誇る小島さんのこの言葉は当時の自分にとって物凄く説得力があった。

その後、『甲虫ニュース』用の原稿を校閲していただいたり、文献を提供していただいたり、形態スケッチを添削していただいたりと、私が教示を仰ぐ形で小島さんとのやり取りが始まり、同年11月には小田原で開催された日本鞘翅学会大会で再会した。この際、ゾウムシ分科会で“森本先生の後継者”としてスケールの大きい発表をされる小島さんに憧憬の念を抱いたことを今でも鮮明に覚えている。

実は、当時小田原で私は森本先生にお会いしている。しかし、私にはそれが

先生との初対面だったという認識はない。その時は先生と直接対話する機会が全くと言って良いほどなかったからである。懇親会の席でも、同定会でも、諸先生方や上の世代の虫屋達が先生を取り囲んでいて、当時駆け出しだった自分はとても割って入ることができなかつたため、ほとんど先生と言葉を交わすことができなかった。しかし、初めて実体としての森本先生を目の当たりにし、シンポジウムの基調講演やゾウムシ分科会での発表を拝聴することができたので、若干の物足りなさを感じつつも、それなりに満足はしていた。

森本先生との“初対面”は1998年の春であった。小島さんを介して「九大院に進学し、ゾウムシの分類をしたい」と先生にお伝えした上で、九州大学農学部昆虫学教室（以下、九大昆虫）を訪問したのである。事前に小島さんから「サルゾウムシ亜科をまとめてほしい」という先生の意向を伝えられていたが、私はヒョウタンゾウムシなど後翅の退化したクチブトゾウムシ類が形態的に好きで研究したいと思っていたため躊躇し、当日まで返答を保留していた。最初に訪れた農学部1号館の301号室で、小島さんに諭され、ようやく承諾するに至ったのであった（「本当は自分もクモゾウムシ類を研究したかったが許してもらえなかった」、「単食または狭食性で寄主植物の特定の部位を餌資源として利用するサルゾウムシ類は、寄主利用の進化を考えるうえで格好の研究対象で、時間があつたら自分が研究したいくらい」というような言い方だったと記憶している）。

当時九大昆虫の教授であった湯川淳一先生（後に私の指導教官となる方で、私は湯川先生から森本先生に匹敵するほど大きな影響を受けた）にご挨拶し、研究室の現況や九大昆虫の院生としてあるべき姿などについてお話を伺った後（「大学院で好きな虫の分類がしたいなら、糞理屈をひりださんといかんぞ〜」と言われた）、小島さんに連れられて2号館1階の標本室に森本先生を訪ねた。

暗めの蛍光灯で照らされた部屋。壁際に並んだ棚には文献や歴史を感じさせる瓶詰の液浸標本などが収められていた。狭い間隔で古めかしい標本棚がいくつもブロック状に収められており、各棚上には埃をかぶった標本箱や段ボール詰めを試料などが山積していた。標本棚の間を縫うように進んでゆくと、薄暗い部屋の一番奥に森本先生はいた。先生と向かい合う壁には文献が所狭しと並んだ本棚がそびえ立っていた。

先生は実体顕微鏡で何やら観察されていたが、小島さんが先生に挨拶して私を連れて来た旨伝えると、「ああ」といってこちらに顔を向けた。小柄だが、が



っしりとした体形。とくに手が頑強で、身長は私の方が高いにも関わらず、その指たるや我が指よりもはるかに太かった。話題は当然サルゾウムシ類が中心で、基本的な関連文献を本棚から引き出しながら色々解説して下さった。この類を研究するためには5ヶ国語(英語とドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語)を勉強する必要があること、日本産は種分類が遅れており、近似種も多いため寄主植物や利用部位を特定しながら分類を進めて行く必要があること、その一方で族や属レベルでの高次分類体系を再検討する必要があること、そのためには内部形態を含む詳細な形態観察を必要があり、まず解剖やスケッチなど研究の遂行上必要なテクニックを習得する必要があること……。

私はあり得ないほど緊張していたため、ひたすらメモを取りながら先生のお話を聴くばかりだった。先生の左目は外斜視だったので、小島さんの方を向いて話をしている、常に自分にも視線が向いているような気がしていつ気を抜いて良いのか分からなかった(後で小島さんにそのことについて尋ねると「たぶん片目で顕微鏡を見ながら(方眼紙を使って)スケッチし過ぎたせいやろね」とのことで、事の真偽は分からないものの、当時の私は先生の凄みを感じた)。小島さんも時折補足的に口を挟む程度で、私は彼が誰に対しても遠慮がない人のように思っていたのに、森本先生の前では予想外に大人しく行儀が良かった。過度の緊張のせいだろうか、私は先輩のその様子が無性におかしくて、笑いを堪えるのが大変だった。その日は最後にサルゾウムシ類に関する基本的文献一式を複写用に拝借したほか、森本先生の論文別刷一式をいただくこともでき、それまで複写しか持っていなかった私はご満悦だった。文献の複写を終えた後、1号館3階の標本室で作業することになった。多数のタイプ標本や原色甲虫図鑑で図示された標本を含む膨大なゾウムシコレクションを目の当たりにして、本当に興奮した。小島さんのアドバイスに従って、その中のサルゾウムシ亜科の標本を一通りチェックし、日本産種の概数を把握するために不明種を含めた暫定的なチェックリストを作成した(二日がかりの作業だったと思う)。当面は小島さんの指導の下で1新種の記載を通して形態スケッチを含む英語での論文作成に取り組む運びとなった。そして、最後にその年に大学院試験を受ける予定だった学部4年生(菖蒲めぐみさんと上地奈美さん)から院試に関する情報やアドバイスをいただき、大学院試終了後に過去問を譲り受ける約束をした。受験科目は英語と生物学、昆虫学で、自分の学力だと昆虫学以外は相当勉強しないと合格できないと感じた。なお、当時の九大昆虫には甲虫類の研究者としては保科英人氏(タマキノコムシ類)、高橋直樹氏(ジョウカイボ

ン類)、後藤秀章氏(キクイムシ類)がおられ、それぞれ小島さんに紹介していただいた。昆研とは大分研究室の雰囲気が違うと感じたことや、保科さんの机上になぜか野村周平氏が祀られていたことが今でも印象に残っている。

東京への帰途、大きな希望とやる気に満ち溢れていた半面、(ここまでお膳立てしてもらっておいて、万が一院試に落ちたら大変だぞ・・・)という不安に駆られてもいた。何が何でも九大院に進学してやると心に決めた。森本先生からいただいた別刷りと複写した文献一式がずっしりと重たかった。

#### ○引用文献

Morimoto, K., 1962. Comparative morphology and phylogeny of the superfamily Curculionoidea of Japan (Comparative morphology, phylogeny and systematics of the superfamily Curculionoidea of Japan. I). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, **11** (4): 331–373.

Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan (Coleoptera). *Mushi*, **50**: 19–85.

\*\*\*\*\*

先生ご逝去後2年余りが経過してもなお、私は(自分が知る先生をどこかに書き残しておきたい)という正の感情と、それとは相反する(もうこれ以上先生との回顧録など書きたくない)という負の感情の狭間に在る。「森本先生のため」あるいは「日本のゾウムシ研究史の一資料として」などとおこがましいことを言えた義理ではない。自分の研究時間を削ってまでそんな書き物をしたところで先生に何を言われるかはわかり切っている。そもそも初心を忘れ、常にその場凌ぎで恬然と生き続けて来た結果としての自らの現状に鑑みて、とても先生に顔向けなどできない不肖の弟子としか言いようがないわけである。ただ、私の死と共に先生との記憶が消えてしまうのは残念だという想いはずっと持ち続けているし、九大院進学後の先生と私との関係について書くことで、わずかながら自分自身が救われるような気はしている。いつか書くかも知れないし、結局書かず仕舞いになるかも知れない。書くとしたら、それは確実に遅々として進まない執筆活動となることだろう。なぜならば、森本桂という人物を媒体として自らの来し方を顧みることは、私にとっては慙愧の念に堪えない、死ぬほどの精神的苦痛を伴う行為であり、現在の自分がもはや青年期の残滓に過ぎないことを認めることに他ならないからである。

## 森本先生と二度の小笠原、そして南鳥島

(257) 井上広光

森本先生の小笠原調査にご一緒させていただく機会に恵まれたのは、先生が退官されて2年が経とうとする1999年のことでした。私は前年から昆虫学教室で学び始め、キジラミ類の分類を志したものの、修士論文で扱うのに手頃な分類群を決められずに焦り始めていました。そこへ、森本先生が小笠原で調査をされるにあたって荷物持ちの学生を探しておられるとのことで、お誘いを受けたのでした。小笠原はキジラミのまともな調査がなされていないフロンティアでしたし、たとえキジラミが不毛でも他の固有昆虫に出会えると思い、二つ返事でお受けしました。3月中旬と6月中旬のそれぞれ10日間ほどの滞在でしたが、父島と母島を調べて多数の固有種を発見し、修士論文にまとめることができました。私が無事に研究者としてのスタートを切ることができたのも、小笠原に連れて行ってくださった森本先生のおかげです。

この旅は両島で被害が出ていたシロアリの調査を兼ねていたため、村役場で公用の軽トラックを借りて島内を移動することになりました。役場との打ち合わせが終わり、当然のように、お供かつ荷物持ちの私が運転するものという流れになりました。しかし、私は運転免許を持っておらず、出だしから平謝りです。先生も、まさか運転できない者が荷物持ちで付いて来るとは思われていなかったようで、事前に確認をされなかったのです。自分の役立たずぶりにいたたまれない気持ちになりましたが、先生は、気にしなくていいよ、と自ら運転してくださったのです。森本先生はたいぶ遅くに運転免許を取られたそうで、教習所の教官から、あなたの実技は十分合格点なのだが、年齢が年齢なのであえて一発合格は出さない、と言われて追加の教習を受けられたという話でした。私は、どうせ車を持てる身分でもないし、そのうち必要になったら取ればいいと思っていたのですが、いざという（まさにこのような）時にこれではいかんと思い、翌年免許を取ることにしたのでした。

森本先生はそれまで何度も小笠原での調査を経験されており、とても慣れておられました。いっぽう初学者の私は採集旅行そのものにも慣れておらず、荷物持ちどころか、お荷物に過ぎませんでした。

父島での先生の常宿は「民宿ささもと」で、昭和の雰囲気が色濃く残るところでした。ここでは和室に先生とふたり相部屋です。今ではもうほとんどないでしょうが、部屋のテレビは100円硬貨を入れないと見られないものでした(も

ちろん地上波)。全国ニュースで、中洲の百貨店「玉屋」が閉店するという話題がブラウン管から伝えられると、先生は感慨深げに見入られていました。私も叔母が玉屋に勤めていたこともあり、子供の頃から馴染みがあるところでしたので、森本先生と互いの玉屋の思い出を語り合ったのでした。

先生は大掛かりなマレーズトラップを持って来られており、私は実物を見るのはこれが初めてでした。乾式のボトルから目に付くサイズの昆虫をひとつおとり回収した後は、節穴の私の目にはゴミにしか見えないような残渣もしっかり袋に回収され、この塵の中にこそ面白いものがあるんだ、と大切に持ち帰られました。場所が小笠原ですし、採れるものはなんでも採って帰るのだという精神を学びました。森本先生は役場の職員とシロアリ調査にあたる時間もありましたが、そのあいだ君は山でキジラミを採っていていいから、と私の成果が上がるよう格別のお気遣いをいただきました。なんとかお役に立ちたいと、私もなんでも採ってやろう精神で網を振り、ビーティングし、枯れ木も割ってあらゆる虫を採りました。当時すでにグリーンアノールの影響でとても少なくなっていたヒメカタゾウムシ類（ハハジマヒメカタゾウ、スジヒメカタゾウ）を採集でき、森本先生に喜んでいただけたことは嬉しいことでした。

森本先生のお供をする機会はまだ一度あり、2000年6月中旬には南鳥島（マールカス島）にも9日間滞在しました。日本の最東端で、面積わずか1平方km余り、最高海拔9mの平坦な小島で、通常は民間人が立ち入ることはできません。この時は、海上保安庁からの依頼で、庁舎のシロアリ被害の調査が目的でした。埼玉県航空自衛隊入間基地から硫黄島行きのC-130輸送機で南に1,200km飛び、さらにここから海上自衛隊のYS-11に乗り換え東へ1,200km、出発から7時間かけて本土から2,000km離れた南鳥島に到着です。もちろん硫黄島でも、乗り換えの1時間ほどのあいだにふたりで網を振りました。余談ですが、自衛隊機に搭乗する際は、事故があった際にも個人を識別できるよう、金属の板に識別番号が刻印された認識票を身に付けます。これを首から下げる際には、金属の冷たさに加えて、万が一の時を想像し、背筋がヒヤリとしたのを覚えています。

南鳥島には木本植物が少なく、キジラミも広域分布の1種しか見られなかったため、立ち枯れた木の根を掘り起こしたり、建物の床下を探索したり、ここでは真面目にシロアリ調査を手伝いました。この島では、夏は午前4時前に日が昇り始めます。4時半ごろ起床し、7時過ぎの朝食までが快適に活動できる

時間です。この時間に森本先生と一緒に、あるいは手分けして島内を歩いて採集しました。文字通り朝飯前の採集です。マレーズトラップやイエローパントラップも仕掛け、多孔菌(きのこ)も持ち帰って微小昆虫を回収しました。功成り名を遂げた大学者にもかかわらず、いやだからこそと言うべきでしょうが、採れるものはなんでも採るという徹底した採集哲学をお持ちでした。

夜は庁舎内で飲み会になるのがお決まりだったのですが、私はまだ 20 代の未熟者でしたので、百戦錬磨の愉快的な隊員の方々からかわれることもしばしばでした。私が自分の未熟さに恥じ入っていると、若いんだから気にする必要はないよ、と森本先生はいつも優しい言葉をかけてくださいました。

南鳥島の昆虫相については、1953 年に坂上昭一博士によって 52 種が報告されたのみでしたが、私たちの調査では最低でも 89 種が得られ、かなりの種の入替わりが認められました。森本先生と一緒にリストを正式にまとめる話もあったのですが、私が博士課程の研究で余力がなく、実現しなかったことは心残りです、申し訳なく思います。採集した昆虫はすべて標本にしてオーダーごとにインロー箱に整理し、昆虫学教室に残しましたので、いつの日か活用されることを願います。

博士課程を修了して昆虫学教室を出た後は、森本先生とのやりとりの機会もほとんどなく、2005 年に就職したことをお知らせした際にメールでメッセージをいただいたのが最後になりました。それでもその後、年に数回は森本先生の教えを思い出すことがあります。小笠原では、お供の私まで「先生」と呼ばれることがあったのですが、森本先生からは「大学に所属していると、たとえ学生であっても一般の人から先生と呼ばれることがあるけれど、くれぐれも(自分は偉いのだと)勘違いをしないように」とアドバイスをいただき、駆け出しの私は心に刻みました。現在、私は農業・食品産業分野の研究機関で働いていますが、「先生」と呼ばれてしまうことがしばしばあります。人にもものを教える仕事ではないので、いつも面はゆさを感じます。きっとこれからも、人から「先生」と呼ばれるたびに当惑して、森本先生と小笠原を旅したときのことを思い出すのだと思います。



写真1 1999年6月16日 小笠原・母島の万年青（おもと）浜で採集中の森本先生



写真2 2000年6月21日 南鳥島で自衛隊機への搭乗前（主翼下、右端が森本先生）

## 森本先生を偲んで

辻 尚道

私が九州大学農学部の学部生として入学した 2013 年から短い間でしたが、森本先生にはたくさんのことを教えていただきました。箱崎の五十周年記念講堂の先生の作業スペースへ伺うと、いつもご自身の作業の手を一旦止めて、その時の面白い発見の話や分類学のことについてお聞かせくださいました。森本先生から教えていただいた内容はすべてノートに取ってある、とよかったのですが、残念ながらほぼメモを取らずに聞いていた私の手許にはわずかなメモとおぼろげな記憶が残るのみです。ここでは少し、先生からお話ししていただいたことで自分が印象的だったことを記したいと思います。

まず記載の読み方について、当たり前のことではありますが、種の同定の際にはそのタイプ標本を見る前に記載文をよく読むように教わりました。ゾウムシ上科の古い文献（～1950 年代ごろまで）には種の識別に重要な生殖器の図はおろか、デフォルメされた全形スケッチしか図の付されていないものが多く、タイプ標本が検討できない種はいかにして記載文の文言がどのような形質状態を表すのかを読み解くことが種の同定に非常に重要です。森本先生もそのようなご経験が豊富であったために、特に記載文を正確に読む力を重要視されていたのだと思います。現在は海外の博物館に所蔵されているタイプ標本についての情報も比較的得やすい環境が整備されつつあり、上記の記載文を読む力は近縁種の同定を行う場面においては重要度が下がっているかもしれません。しかしながら、新型コロナウイルス流行による行動制限によって海外の博物館で多くの種のタイプが検討できない現状においては、記載文から最も近縁な分類群を特定する力、あるいはまったく別の分類群として記載されている種を近縁種だと見抜く力は、見直されるべき重要な能力であると思います。

森本先生からは、貴重文献収集の苦勞話についてもよくお話を伺いました。中にはここでは書けないような裏話もあり、当時どれほど分類学の貴重文献を集めることが難しかったのかを窺い知ることができました。近年では国内外における文献のデータベース化や Web 上での PDF データ公開が急速に進んでおり、分類学者にとっては見逃せない重要な動きとなっています。この動きは、文献の収集だけでなく、国内雑誌を海外の研究者に広く公開することにも当然有効です。森本先生の論文についても、海外に出回りにくかった林業試験場研究報告などの国内雑誌に掲載されたものは、海外から森本先生のもとに問い合

わせが多かったようです。このような国内雑誌はすでに過去の出版物の PDF 公開が Web 上で整備されているものも多く、今後ますます多くの人が森本先生の業績を利用するため、森本先生の業績目録はそれぞれの国内雑誌の公開ページへのリンクを付けて、Web 上で公開されると良いと考えます。

まとまりの内容になってしまいました。先生のご功績に深甚なる敬意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。



## 森本先生から学んだことと思い出

今田舜介

森本桂先生が亡くなってから早2年になる。私にとって森本先生は九大農学部を志すきっかけになった人物であり、また、研究するにあたり様々なことを学ばせていただいた。弟子と自称するにはあまりに短い期間だったため、追悼文の執筆は躊躇っていたが、今回ありがたいことに、広渡俊哉先生から追悼文執筆のお誘いをいただき、思い立って追悼文を書き記すことにした。

森本先生に初めてお会いしたのは2016年10月6日で、朝早くに丸山宗利先生に紹介いただいた。ヒゲナガゾウをやりたいとお伝えしたので、この類の研究を始めるにあたり必要なことをご教示いただいた。まず見るべき文献は Schoenherr、Rheinheimer、そして Junk のカタログの3つだをご教示いただき、それらのコピーを命じられた。次に、日本のファウナがわかるようにと、ヒゲナガゾウ標本の未整理分を整理する仕事を与えていただいた。また、この類の大家であった K. Jordan の記載は違いしか書いておらず、原記載だけ見てわからないからと、Jordan のタイプ標本を撮影したフィルムの存在も教えていただいた。たったこれだけではあるが、このご助言のおかげで良い研究のスタートを切ることができた。

私は修論でノミヒゲナガゾウ *Choragus* を扱おうとしたのであるが、難分類群のため、そのお許しが出るには時間がかかった。甲虫学会の大会で日本ゾウムシ情報ネットワークの方々とお会いし、色々と有益な情報を得て、年明けにノミヒゲナガゾウの分類をやりたいとお伝えしに行った。ところが、森本先生からは「*Choragus* をやるのはちょっと待ってください」というノーの返事だった。要約すると、妹尾俊男先生がやっていたし、さらに先行研究に問題が多々あり、卒修論で扱うのはお勧めできないということだった。また、「*Choragus* と *Melanopsacus* の違いはわからないよ」と何か含みのある言い方もされた。この日は最初こそ厳しく感じたが、その後はヒゲナガゾウに関する興味深い話をしていただいた。中でも面白かったのはワタミヒゲナガゾウの話で、島ごとに斑紋変異の割合が異なることや、百均の洗濯ネットにギンネムの鞘を入れると簡単に羽化することを教えていただいた。結局、森本先生から研究のお許しが出たのは2019年の2月であった。タイを拠点にされていた妹尾先生が日本に戻

って来られ、博物館を訪問され、森本先生、妹尾先生、私と3代の研究者で交流する機会を作っていた。妹尾先生からは2018年5月にタイでお会いした際に既に承諾いただいていたが、このときに森本先生からもノミヒゲナガゾウの研究をやることについて承諾いただき、背中を押していただいた。

森本先生が2019年9月3日にお亡くなりになってからは、様々な追悼行事のお手伝いをさせていただいた。博物館で開催された追悼シンポジウムの運営、甲虫学会和文誌で森本先生のゾウムシ研究を概観する解説の投稿（辻尚道さんと共著）、そして、甲虫学会英文誌で追悼論文の投稿（小島弘昭先生と共著）。追悼論文では2新種に *Disphaerona katsurai* および *D. mihokoae* と命名し、森本桂先生と奥様の美保子さんの両名に献名した。ご夫婦に献名しようと思ったのは、森本先生がご病気後、リハビリを兼ねて毎週金曜日に博物館の「ゾウムシ研究室」に車椅子で通われており、その際に、奥様が付き添われているのをそばで見えていたからである。

遺された者として自分にはどう貢献ができるのか時折考える。分類学者の端くれとして、森本先生の夢であった日本産ゾウムシ相の全容解明を叶えるべく、分類学的研究を進めることだというのは言うまでもない。ただ、それ以外にも、例えば、森本コレクションの整理にも取り組んでいる。森本コレクションは、標本の大多数がマウントされ採集ラベルも付けられているが、それでも相当な数の同定依頼と、それに伴う寄贈標本があったために、未マウントや未ラベルのままのものも少なくない。中には Paratype などの一部もその状態にあった。タトウのメモなどから採集データが明確なものに関しては、時折、標本のマウントやラベル付けをしている。コレクションがより一層充実し、私が現在そうさせていただいているように、未永く研究に活用されるためである。

今になって思うと後悔がたくさんある。1本目となる記載論文のことや、ヒゲナガゾウで研究費を取ったことは報告できなかった。森本先生が標本に New Genus と書き遺した種は、記載を狙ったが、新属新種 *Portentus marschneri* として昨年記載されてしまった。我儘を貫いて研究を始めたノミヒゲナガゾウは、昨今の国際事情の影響があるとはいえ、未だそれに関する論文が出せていない。挙げればきりが無いが、あの世で再び森本先生にお会いする日には後悔がないように、残りの人生を過ごしたいものである。

ひこさんがらがら 12号  
2022年4月30日発行  
編集・発行 ひこさんがらがらの会  
福岡県西区元岡 744  
九州大学農学部昆虫学教室  
印刷 株式会社 春日

